元総社明神遺跡II

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財確認調査概報

昭和59年 3 月

前橋市教育委員会

序

元総社明神地区は、推定上野国府の地にあたり、群馬県の歴史を、解明するための重要な地域です。

しかし、近年の社会事情から、区画整理事業は避けられない問題となりました。

そこで、その事業に先立ち、遺跡の確認調査を実施する運びとなり昨年度は、古墳時代の住居跡群と平安時代の住居跡群を確認することができました。

引き続き、今年度は、昨年の成果を踏まえ、幹線道路取り付け部の北側にあたる道路内の調査を行いました。

その結果、古墳時代の前期から後期、奈良時代、平安時代まで、長い期間、この地域に人々の生活が営まれたことを示す竪穴住居跡が検出された他、上野国府との係わりが考えられる平安時代の大溝、および中世末期の溝の存在などを確認することができました。

また、現地説明会には、地元の多数の皆様に参加していただき、この地域の埋蔵文化財に対する理解と関心を深めていただく良い機会も作ることができました。

なお、この調査の成果は、記録保存という形ではありますが、将来、上野国府の様子を明らかにするための大きな手がかりとなるものです。

最後に、この調査を実施するにあたり、御協力いただきました地権者、区画整理審議会委員、宅地開発課の担当者および炎暑の中で直接発掘調査に携わった調査担当者、作業員の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和 59 年 3 月 31 日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1. 本報告書は、前橋市都市計画事業元総社西部第三明神地区土地区画整理事業に係わる前橋市元総社町字屋敷に所在する元総社明神遺跡（58Ａ１）の確認調査概報である。
2. 確認調査は、元総社西部第三明神地区土地区画整理事業に先立って、道水路部分その他に対して、前橋市教育委員会が実施したものである。
3. 調査は、1983年５月13日から８月10日まで実施された。
4. 調査は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係職員、岸田治男、鵤木晋一、江部和彦、福田瑞穂が担当した。
5. 本報告書の作成にあたっては、調査担当者の協議に基づき、編集・執筆を岸田治男、福田瑞穂が担当した。
6. 遺物の整理及び復元は、千明香根子が行った。また、遺物の実測は、湯浅たま江、遺構・遺物のトレースは、湯浅道子、遺構・遺物の修正及び計測は、渡木秋子が行った。
7. 本報告書で用いる北は、すべて真北を示している。
8. 本調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会で保管している。
9. 調査に参加した方々は、次の通りである。記して感謝する次第である。

青木鶴秋	阿部良子	飯田五郎	岡田カツ子	大木道子	小野里徳一
沢田芳子	新保一美	住谷静江	住谷文彦	須藤マツエ	高島　康
千明仁至	千明香根子	渡木秋子	渡木昌範	中村　貢	中村きぬえ
林　次夫	槇塚佳子	水野キク江	宮石明彦	森田博治	湯浅たま江
湯浅道子	湯浅礼子				

凡　　例

1. 各遺構の略号は次の通りである。

   H…土師器使用住居　D…土坑　W…溝状遺構　I…井戸　M…古墳　P…ピット

2. 各遺構実測図の縮尺は、住居址1/60　竈1/30　溝1/120　井戸1/60を原則とした。
3. 遺物実測図は1/4を原則とした。
4. 遺構挿図中のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

   地層断面下　　竈部分
   焼　土　　灰層

   遺物挿図中のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

   須恵器断面　　緑釉断面
   灰釉断面　　施釉部分

5. 本文中の「FH－６」は、Ｆトレンチ６号住居址を示す。同様に「８Ｗ－１」は８トレンチ１号溝を示している。

目　　次

序
例　言
凡　例
I　調査の経過……2
1.　調査区の位置と立地……2
2.　調査の概要……2
・調査の方法……2
・調査の進行及び結果……2
II　層序及び遺構分布図……4
III　遺構と遺物……7
1.　FH－6号住居址……7
2.　11H－3号住居址……9
3.　11H－4号住居址……12
4.　9H－3号住居址……13
5.　9H－5号住居址……15
6.　10H－4号住居址……16
7.　5H－12号住居址……19
8.　5H－8号住居址……20
9.　5H－18号住居址……22
10.　5H－14号住居址……24
11.　10H－3号住居址……26
12.　9H－1号住居址……27
13.　9H－8号住居址……28
14.　溝……30
15.　その他の遺構……36
IV　まとめ……44

挿　図　目　次

第１図　遺跡群の位置……３
第２図　元総社明神遺跡トレンチ設定図……４
第３図　基本土層……折込み
第４図　元総社明神遺跡Ⅱ遺構分布図…折込み
第５図　FH－６号住居址 ……７
第６図　FH－６号住居址遺物分布図 ……８
第７図　FH－６号住居址出土遺物 ……８
第８図　11H－３号住居址・竈……９
第９図　11H－３号住居址遺物分布図……10
第10図　11H－３号住居址出土遺物……10
第11図　11H－３号住居址出土遺物……11
第12図　11H－４号住居址……12
第13図　11H－４号住居址遺物分布図……12
第14図　11H－４号住居址出土遺物……13
第15図　９H－３号住居址……14
第16図　９H－３号住居址遺物分布図……15
第17図　９H－３号住居址出土遺物……15
第18図　９H－５号住居址……16
第19図　９H－５号住居址出土遺物……16
第20図　９H－５号住居址出土遺物……16
第21図　10H－４号住居址・竈……17
第22図　10H－４号住居址遺物分布図……18
第23図　10H－４号住居址出土遺物……18
第24図　５H－12号住居址・竈……19
第25図　５H－12号住居址遺物分布図……20
第26図　５H－12号住居址出土遺物……20
第27図　５H－８号住居址・竈……21
第28図　５H－８号住居址出土遺物……21
第29図　５H－８号住居址遺物分布図……21
第30図　５H－18号住居址・竈……22
第31図　５H－18号住居址遺物分布図……23
第32図　５H－18号住居址出土遺物……23
第33図　５H－14号住居址・竈……24
第34図　５H－14号住居址遺物分布図……25
第35図　５H－14号住居址出土遺物……25
第36図　10H－３号住居址……26
第37図　10H－３号住居址遺物分布図……26
第38図　10H－３号住居址出土遺物……27
第39図　９H－１号住居址……27
第40図　９H－１号住居址遺物分布図……27
第41図　９H－１号住居址出土遺物……28
第42図　９H－８号住居址・竈・遺物分布図29
第43図　９H－８号住居址出土遺物……29
第44図　８W－１号溝……30
第45図　６W－１、11W－１号溝……31
第46図　９W－１～３号溝……32
第47図　11W－３号溝……33
第48図　８W－１号溝……34
第49図　８W－１・９W－１・９W－３号溝
出土遺物……35
第50図　FM－１号墳 ……36
第51図　FM－１・11Ⅰ－１・８Ⅰ－１号
井戸、８W－１号溝石組み遺構……37
第52図　FM－１号墳、５H－19・５H－13
８H－15号住居址出土遺物……38
第53図　５H－16・９H－４・FH－８・
５H－９号住居址出土遺物……39
第54図　推定上野国府域と古瓦散布地……41

付　表　目　次

第１表　周辺遺跡……３
第２表　発掘経過表……４
第３表　９H－５号住居址編物石計測表……16
第４表　遺構一覧表……40・41
第５表　出土遺物一覧……42・43

元総社明神遺跡II

I　調 査 の 経 過

1.　調査区の位置と立地

元総社明神遺跡が立地する前橋市元総社町字屋敷は、前橋市街地である県庁から利根川をはさんで西約2㎞のところにある。遺跡は市道大友・西通線（通称産業道路）と県道安中・前橋線が交わる付近の北西に所在する。遺跡のすぐ西には牛池川をはさんで上野国総社神社が鎮座する。

遺跡の所在する地域は前橋台地上であり、標高約114mの北西から南東のゆるやかな傾斜地に立地する。榛名山中に源を発する中小河川も東南方向に並走し、台地を細長く開析しており、各河川によって開析された台地の幅は1㎞内外である。

元総社明神遺跡はこの滝川と牛池川にはさまれた台地上にあり、牛池川との比高は3～4mをはかる。現在、遺跡地東側は区画整理が完了しているが、遺跡地は田園風景が宅地化の中でとり残され、桑園を主とした畑として利用されている。

2. 調 査 の 概 要

調査方法

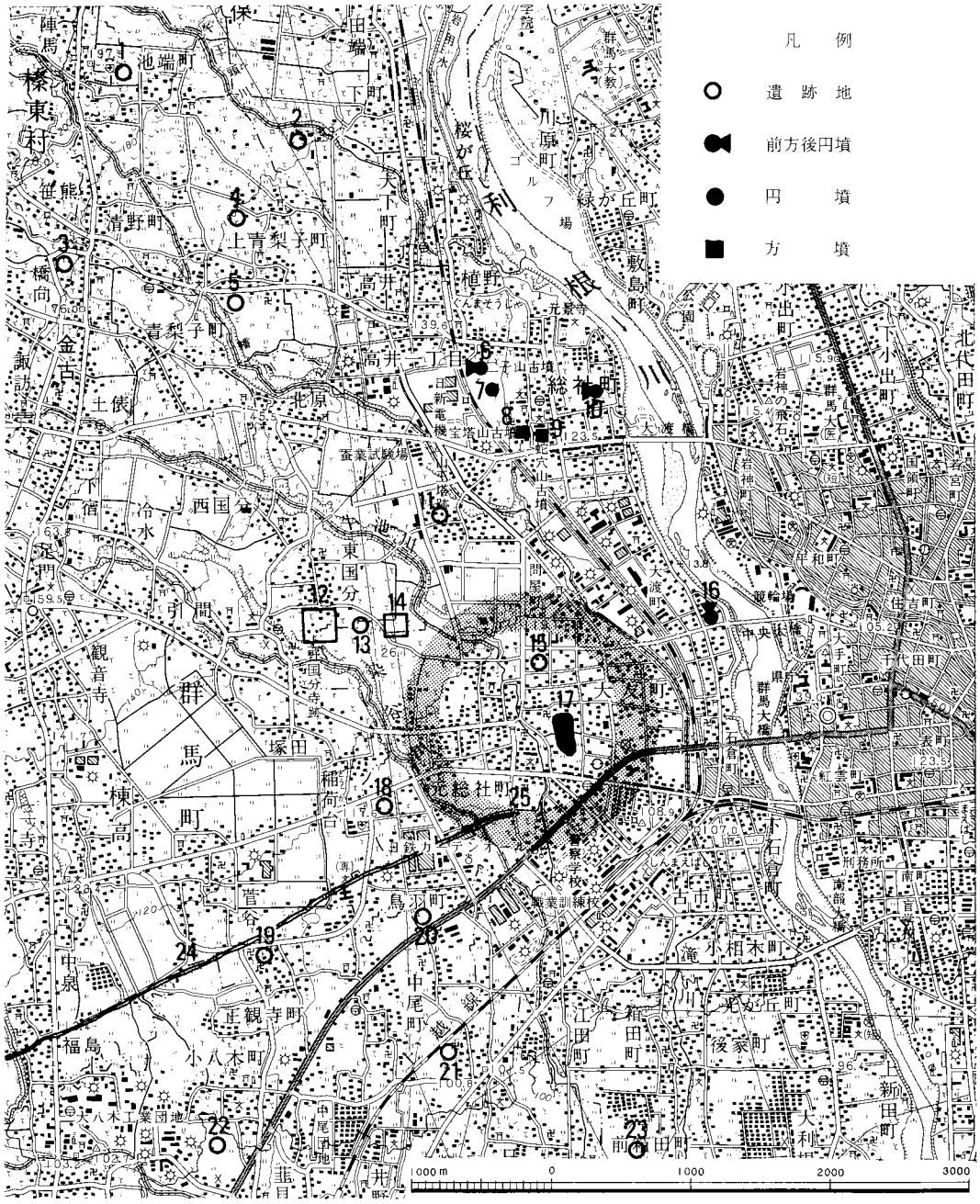
発掘調査にあたっては昭和57年度実施の第1次調査を継承した。トレンチは57年度からの連番で用い、道水路部分に沿って、東西トレンチに算用数字、南北トレンチにアルファベットで呼称した。そのため道水路予定地に沿った形で幅3～6mのトレンチを設定し、延長方向に工事中心杭を基準として5m四方のグリッドを設定した。グリッドの呼称は西から東へ算用数字、北から南へアルファベットを用いている。

調査は表土層の除去後、直ちにプラン確認に入り、並行してグリッド設定とB.M.の設置を行った。その後、遺構の配置図を作成し、各遺構の調査工程を検討し、調査に着手した。測量基準点については、工事中心杭の平面国家座標を用い、水準点も利用した。

調査終了後には、前橋都市計画事業元総社西部第三明神地区土地区画整理事業が実施される予定である。

調査の進行及び結果

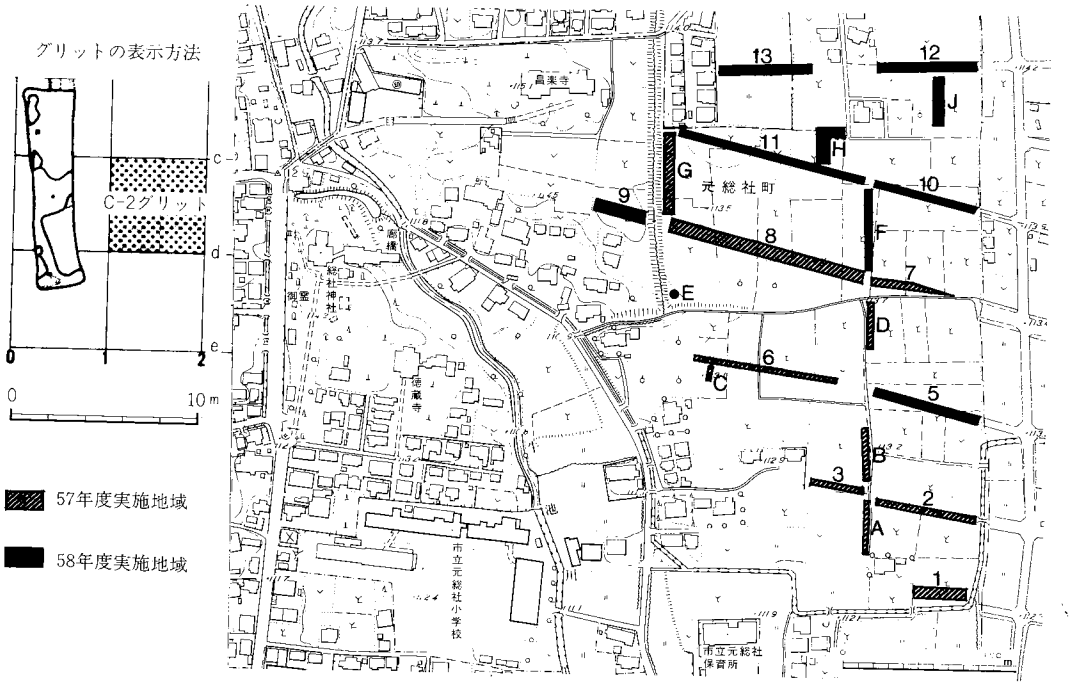
今年度の調査は5月13日より着手し8月10日までの約3ケ月にわたって実施した。今年度のトレンチは5～11トレンチ、Fトレンチの計7本を調査し、古墳時代前期から奈良・平安時代にいたる多数の住居跡、井戸、土壙、古墳、八日市場城の堀跡、閑泉樋遺跡の大溝と直交が考えられる大溝の検出等の成果が収められた。しかし、調査の進行は5トレンチにおける住居群の著しい重複や8トレンチの大溝における夥しい出土遺物、全トレンチにおけるプラン確認の難行によって調査の進捗状況が大きくはばまれ、調査終了間際になると、調査費もすでに底をつき職員の手によって図面等の作成を余儀なくされ、調査を完了させるに至った。



第1図　遺跡群の位置（1/50,000）

第一表周辺の遺跡

1	清里陣馬遺跡	7	愛宕山古墳	13	国分寺中間地域遺跡	19	正観寺遺跡
2	長久保遺跡	8	宝塔山古墳	14	国分尼寺	20	中尾遺跡
3	長久保古墳群	9	蛇穴山古墳	15	閑泉樋遺跡	21	日高遺跡
4	庚申塚遺跡	10	遠見山古墳	16	王山古墳	22	小八木遺跡
5	清里南部、中島遺跡	11	山王廃寺	17	元総社明神遺跡	23	前箱田遺跡
6	総社二子山古墳	12	国分僧寺	18	鳥羽遺跡	24	推定東山道
						25	推定国府範囲

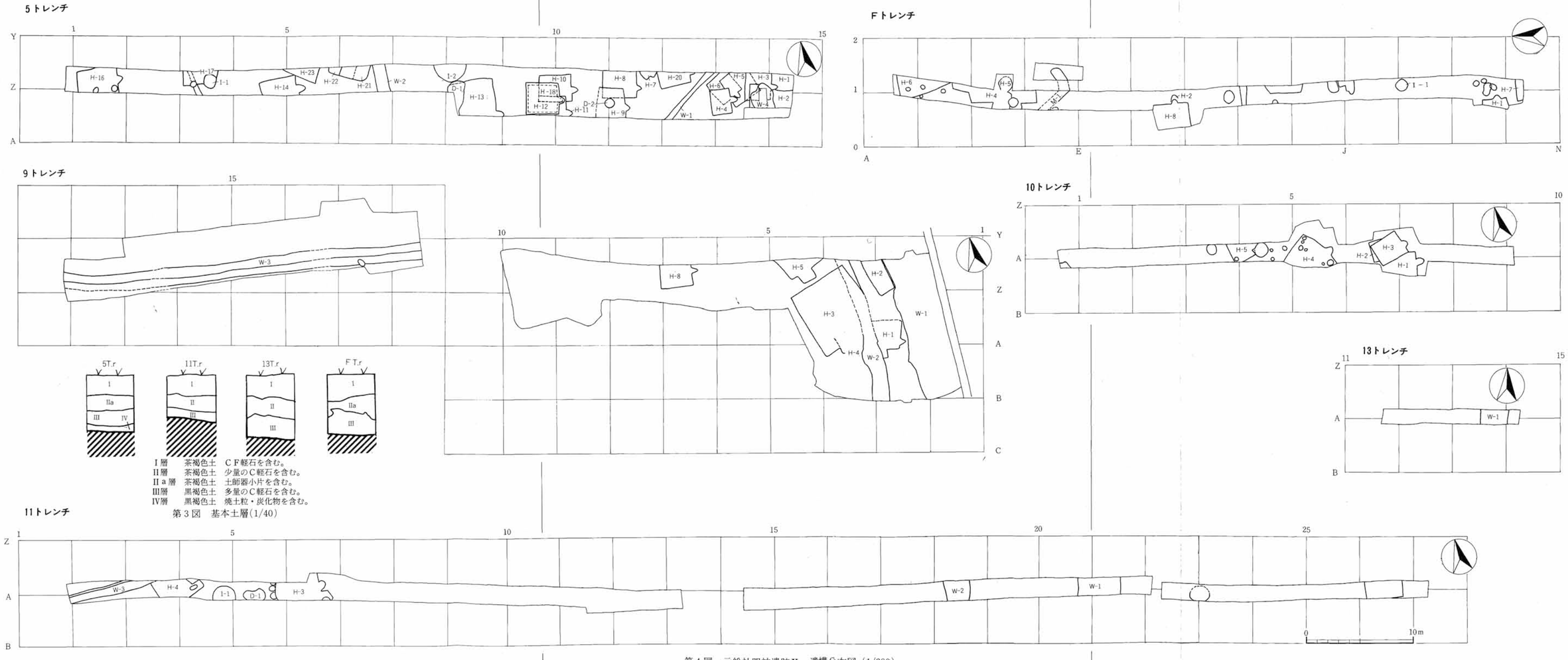


第２図　元総社明神遺跡トレンチ設定図(1/5,000)

区名		5 Tr					6 Tr		8 Tr		9 Tr			10Tr		11Tr			FTr			
月	遺構	住居	井戸	土壙	溝	その他	溝	その他	溝	その他	住居	溝	その他	住居	その他	住居	溝	その他	住居	古墳	井戸	その他
5	15																					
	25																					
6	5																					
	15																					
	25																					
7	5																					
	15																					
	25																					

第２表　発掘調査経過表

II　層序及び分布図



第3図　基本土層(1/40)

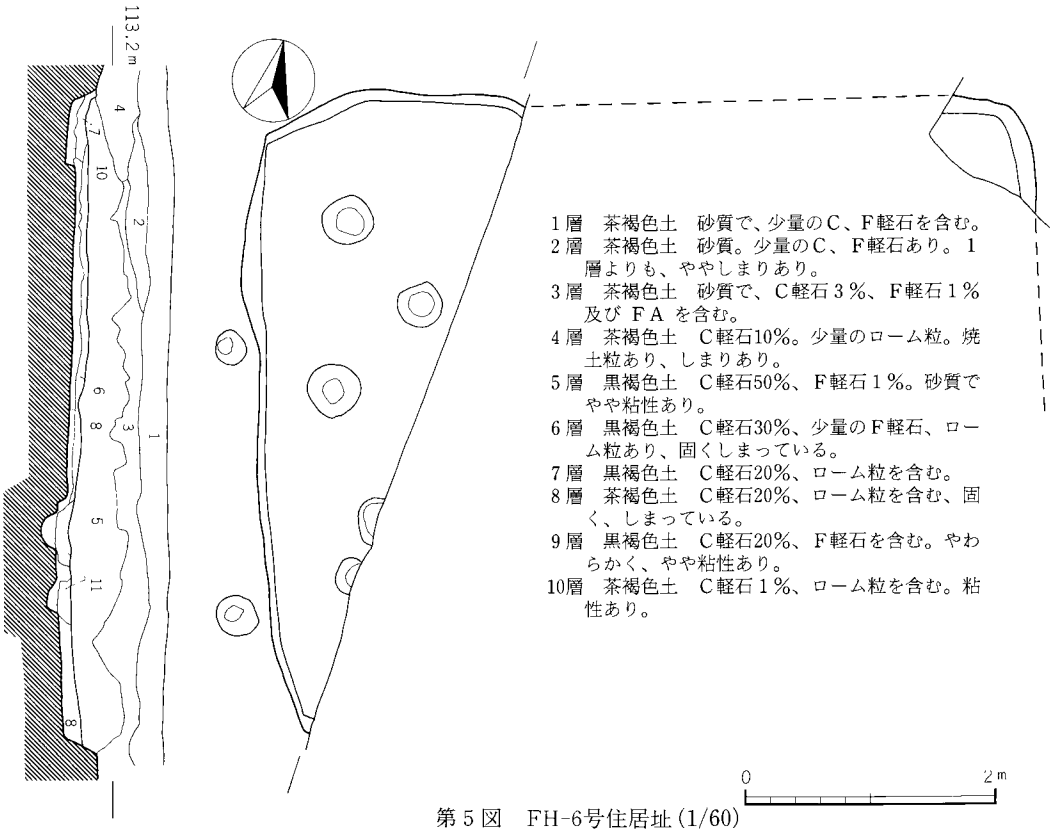
第4図　元総社明神遺跡II　遺構分布図（1/300）

III　遺構と遺物

1．FH－6号住居址

遺　　構（第5図、図版3）

本遺跡地のほぼ中央を南北に展開するFトレンチの最北端A－1、B－2グリッドに位置する本住居址は、トレンチ調査による制約のため、西側部分3分の1が確認されたにすぎない。また、Fトレンチに直交して東にのびる10トレンチのZ－1グリッドにおいて、北東隅がわずかに検出されている。主軸方位はN77°Eをとり、規模はおよそ6.35m×5.10mを測るもようで、平面形は長方形を呈するものと予想される。壁はほぼ80°の角度で立ち上がり、確認壁高は約25cmである。覆土は13層に細分され、2層と3層の境界にはFAブロックが見られる。床面は黒褐色で全体に亘って貼床が施されており、厚さは中央部で約10cm、壁付近では20cmを測る。床面の堅緻なところは、住居中央に若干硬化した部分もみられるもののその他は軟弱である。ピットは住居内に5個住居外に周壁に沿うようにして2個検出されているP_1、P_2、P_6、P_7は柱穴と推定され、P_1は径36cm深さ63cm、P_2は径42cm深さ64cm、P_6は径21cm深さ45cm、P_7は径31cmを測る。P_1～P_2の柱穴間距離は1.4m、P_2～P_5が1.5mで、その柱穴間距離とP_5の位置からみるとP_5が柱穴であ



第5図　FH-6号住居址(1/60)

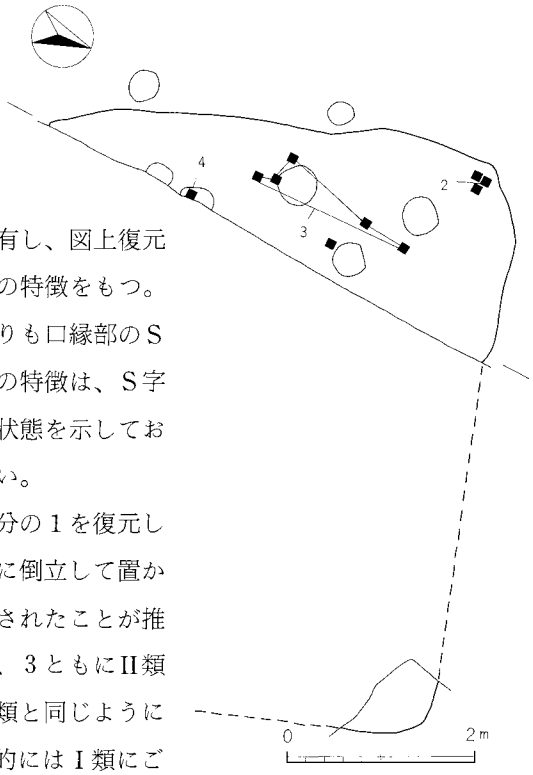
る蓋然性は高いが、径25cm深さ15cmの規模からみて柱穴としては疑問が残る。

炉址と思われる焼土部分が P_3 に隣接して、幅20cm深さ14cmの範囲で分布している。

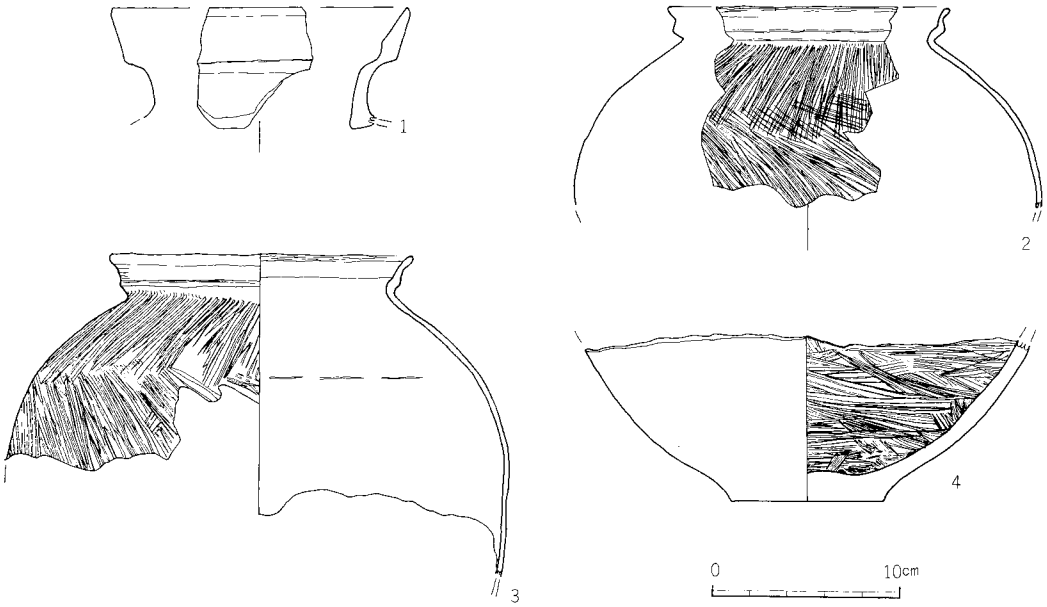
遺　　物（第７図、図版６）

出土遺物は小破片が多く、図示しえたのは３点のみである。内訳は脚部欠損のＳ字口縁脚付甕２個体と有段口縁壺の口縁部破片１個体である。１の有段口縁壺は口縁部に明瞭な段を有し、図上復元では肩部から大きく湾曲していく器形の特徴をもつ。２、３はＳ字口縁脚付甕で、２は３よりも口縁部のＳ字が明瞭でしかもハケメが細かい。３の特徴は、Ｓ字口縁の外面凸部があたかも稜のような状態を示しており、しかも内面は３と較べて明瞭でない。

遺物の分布傾向をみると、全体の２分の１を復元しえた２、３のＳ字口縁脚付甕は、床面に倒立して置かれた後、南方向からの力によって破壊されたことが推定される。下郷編年を援用すると、２、３ともにII類に分類できる。ただ、ナナメハケがＩ類と同じようにザックリと入っていることから、年代的にはＩ類にごく近いものと思われる。



第６図　FH-6号住居址遺物分布図(1/80)



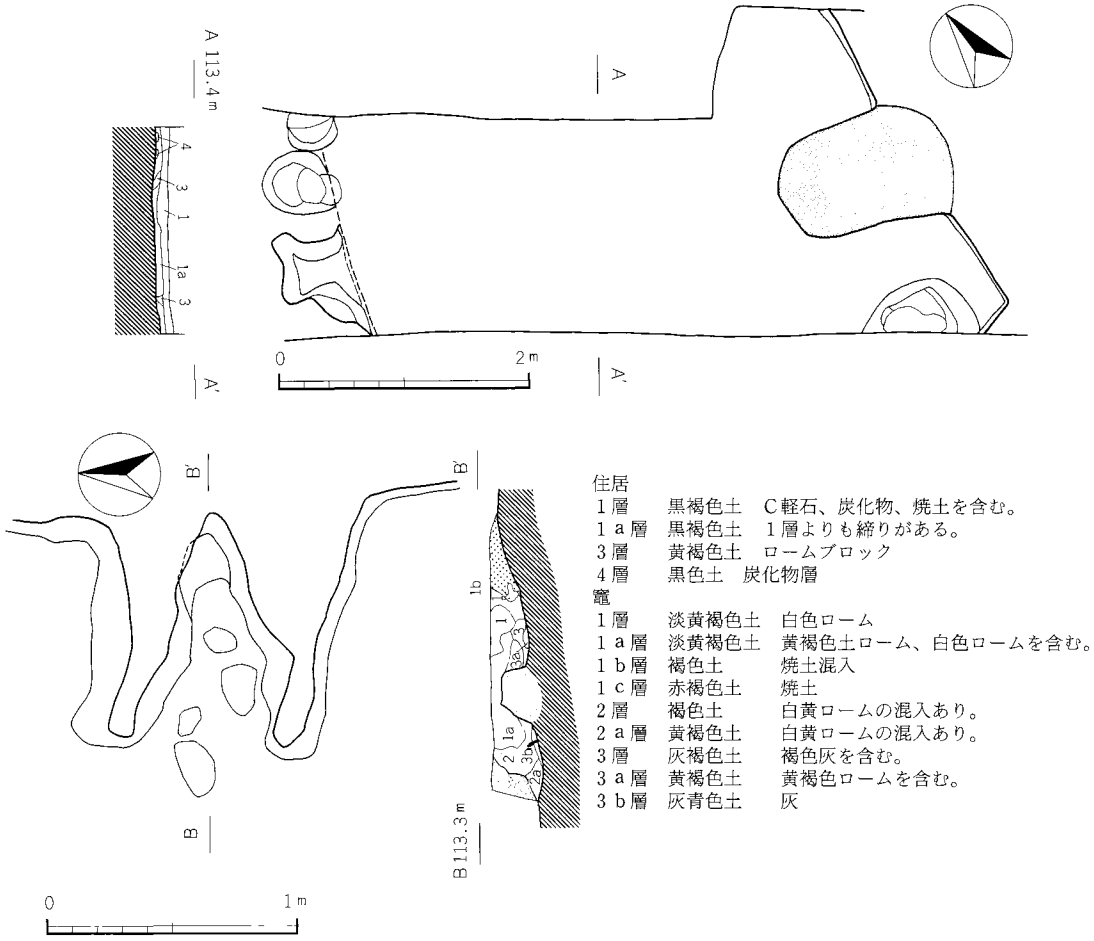
第７図　FH-6号住居址出土遺物(1/4)

2. 11H－3号住

遺　構（第8図、図版4）

11トレンチZ－6、7、A－6、7グリッドに位置する。トレンチの西部の微高地上に形成されている本住居址は、トレンチ調査のため西7mに存在する11H－4号住と同様に南北壁を調査区外に突出させている。主軸方位はN73°Eをとり、規模は推定東西壁4.49mを測れるのみである。

壁は確認壁高15cmと薄く、東壁はしっかりとした壁がたっているが、西壁はピット群の攪乱によって定かでない。覆土は2層に分かれ、第2層中には炭化物ブロックが混在している。床には全面に亘って粘質土による貼床が施されており、竈前面が特に堅緻である。住居址中央には粘質土と炭化物が互層を為し、その下に遺物が床面密着して出土している。焼失住居であろう。柱穴は確認されなかったが、壁際の東南隅には隅丸方形で42×36cmの規模をもつ貯蔵穴が存在する。



第8図　11H-3号住居址(1/60)・竈(1/30)

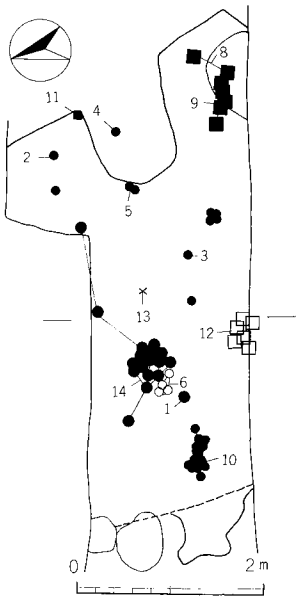
竈（第８図、図版４）

東壁中央からやや南寄りでN81°Eを向く。確認全長98cm、幅95cm、焚口部長35cm、燃焼部長35cm、煙道部長25cmで、幅はそれぞれ50cm、25cm、20cmを測る。煙道部は上部削平をかなり受けているためか壁外へ張り出さず、約30°で立ち上がる。構築に際して粘質土と砂質凝灰岩を用いている。特に砂質凝灰岩が竈全面に散乱しており、天井材として用いたと考えられる。竈中央部には砂質凝灰岩の支脚が認められ、燃焼部には灰層が厚く堆積し、煙道部が硬く焼土化している。

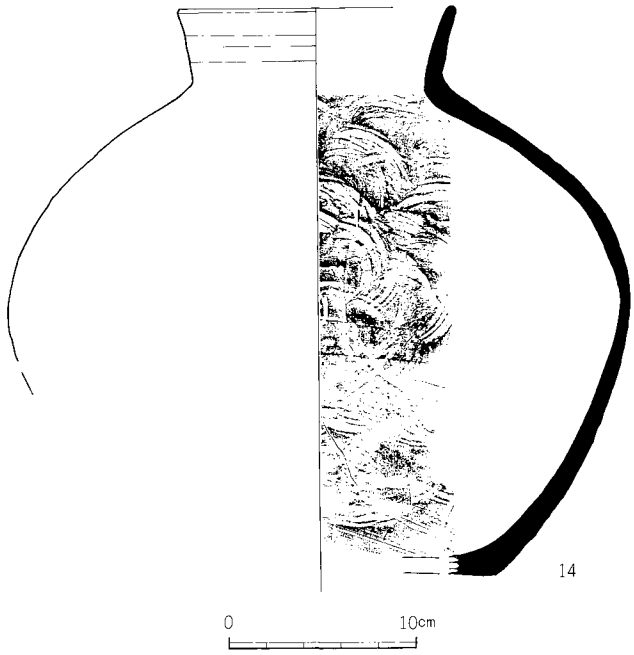
遺　　物（第10・11図、図版6・7）

遺物は土師器が大半を占め、須恵器は３点を数えるにすぎない。主なものをあげると、土師器は杯５点、甕３点、甑２点、須恵器は杯１点、大甕１点、長頸瓶１点があり、その他の出土遺物に管玉がある。杯４と甕11、甑は竈内から、甑９は竈右袖に接するようにして出土している。また、杯５は竈の前から、須恵杯６と須恵大甕14と管玉は住居中央から検出されている。

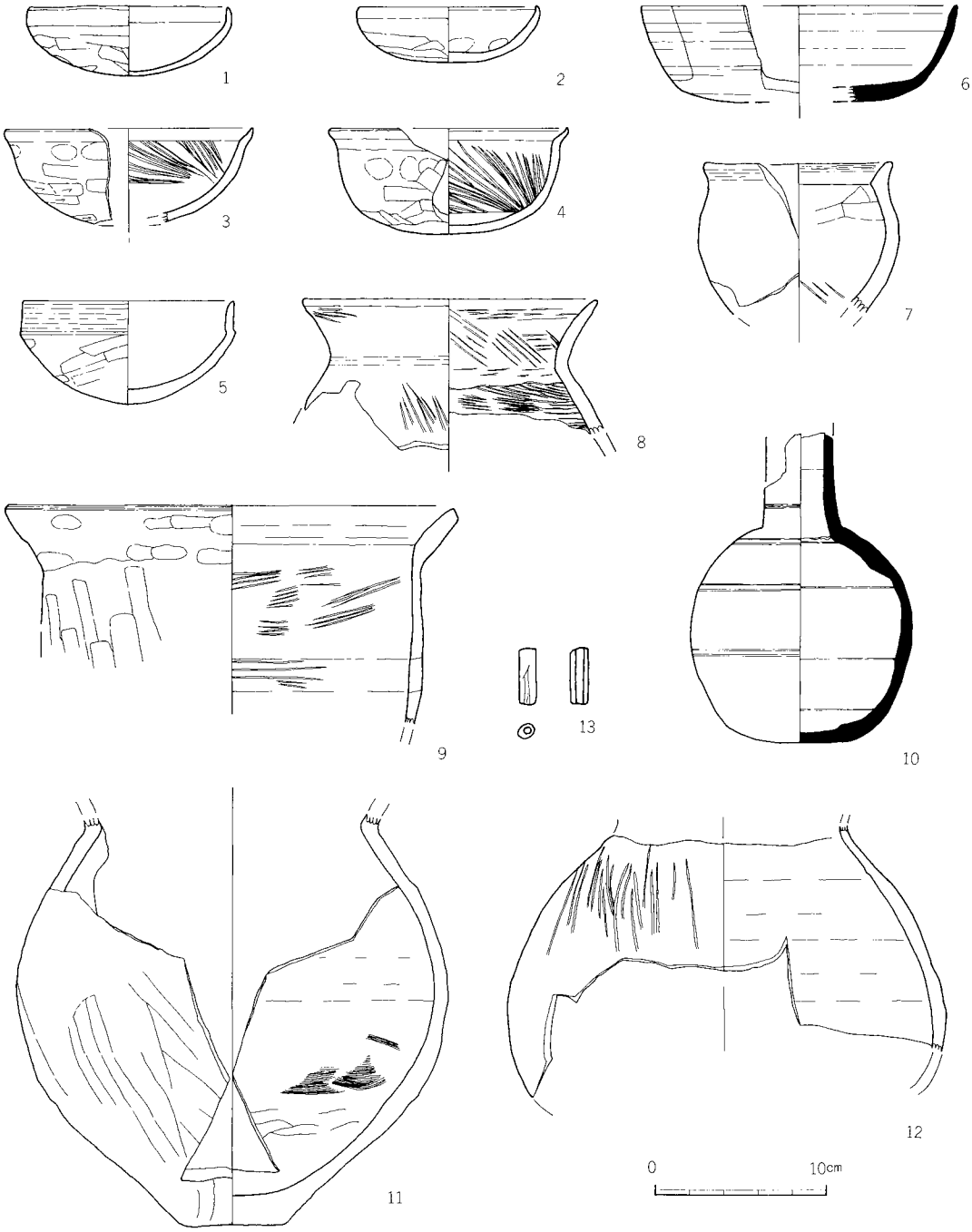
土師杯３と４は内斜口縁杯で内面に暗文を施されている。体部は４の方が下膨れ気味で暗文の入り方も粗いが、３はスリムな体部を有し暗文も密である。杯５は須恵の模倣杯で、体部に明瞭な外稜を有する。口辺は直立するが口縁において僅かに内傾し、器高は深い。甕８は体部に粗いハケメをもつ。甕11と12は最大径を胴部中央にもち、甕11の体部にはケズリが12にはミガキが施されている。ほかに小形甕７が竈内から出土している。大形甑の９は最大径を口縁にもち、体部は若干の膨みをもって底部に至ると推定される。須恵杯６は器高が深くかなり大形で、自然釉のかかった堅い焼しめの土器である。



第９図　11H-3号住居址
遺物分布図(1/80)



第10図　11H-3号住居址出土遺物(1/4)



第11図　11H-3号住居址出土遺物(1/4)

3. 11H－4号住居址

遺　構（第12図、図版3）

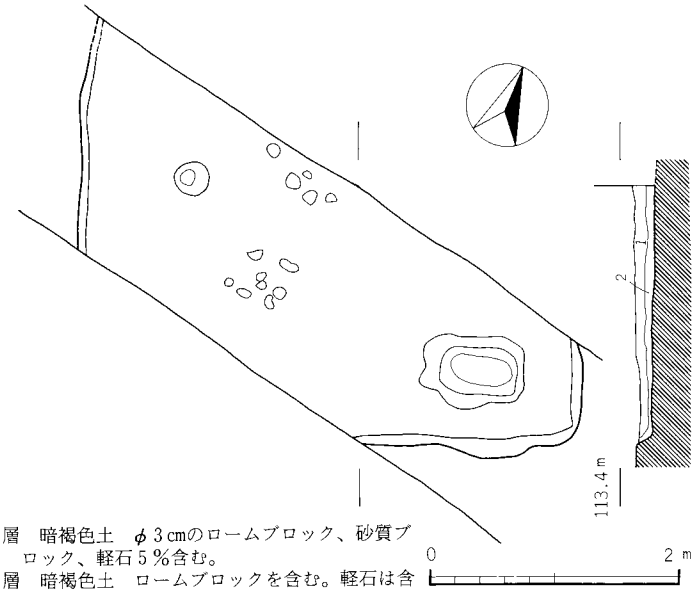
11トレンチ西端部Z－5、4、A－5、4グリッドに位置し、西壁をわずかに11W－3号溝によって切られている。東7mには、ほぼ同時期の所産と考えられる11H－3号住が存在している。平面形は、方形あるいは長方形を呈すると推定され、主軸方位はN71°Eをとる。壁は確認壁高10～13cmを測り、薄いながらもしっかりとした様相を呈している。規模は南壁のみ推定でき、4.09mほどである。覆土は2層に分かれ、トレンチ北側の地層断面には灰層と若干の焼土が見られる。床面は全体に堅緻であるが、貼床は施されておらずローム層を掘りこんだ地山床である。周溝・柱穴はなく、P_1は貯蔵穴で隅丸方形を呈し85cm×56cm、深さ47.5cmを測る。西壁1mの位置から浅いピット状の凹みが検出されている。

竈

北側調査予定地外に存在すると予想され、竈の痕跡とみられる灰層と焼土が地断にでている。

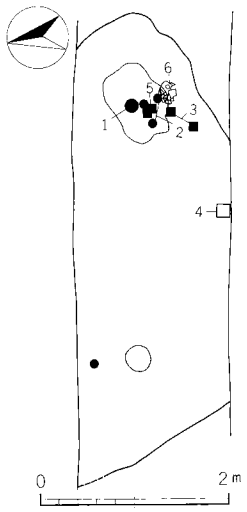
遺　物（第14図、図版7）

出土遺物は55点記録されており、そのほとんどが土師器である。図示した土器は、土師器が杯2、甕2、甑1で、須恵器は長頸瓶1である。土師杯は須恵の模倣杯で、1は口辺がほとんど外反せず直立し、口縁において若干内湾しているが、2は口辺の外反が著しい。甕3は底部残存で器形を窺えないが、かなり胴部の張った器形が推定される。6は小形甕で最大径を胴部にもち、口辺を強く外反させている。甑5は貯蔵穴内から完形で出土している。器形は口縁に最大径を有し、外面にケズリ内面にはミガキが入り底部がすぼまっている。須恵長頸瓶の破片4は、精選された胎土で焼成されており外面に波状文が2ケ所つけられている。

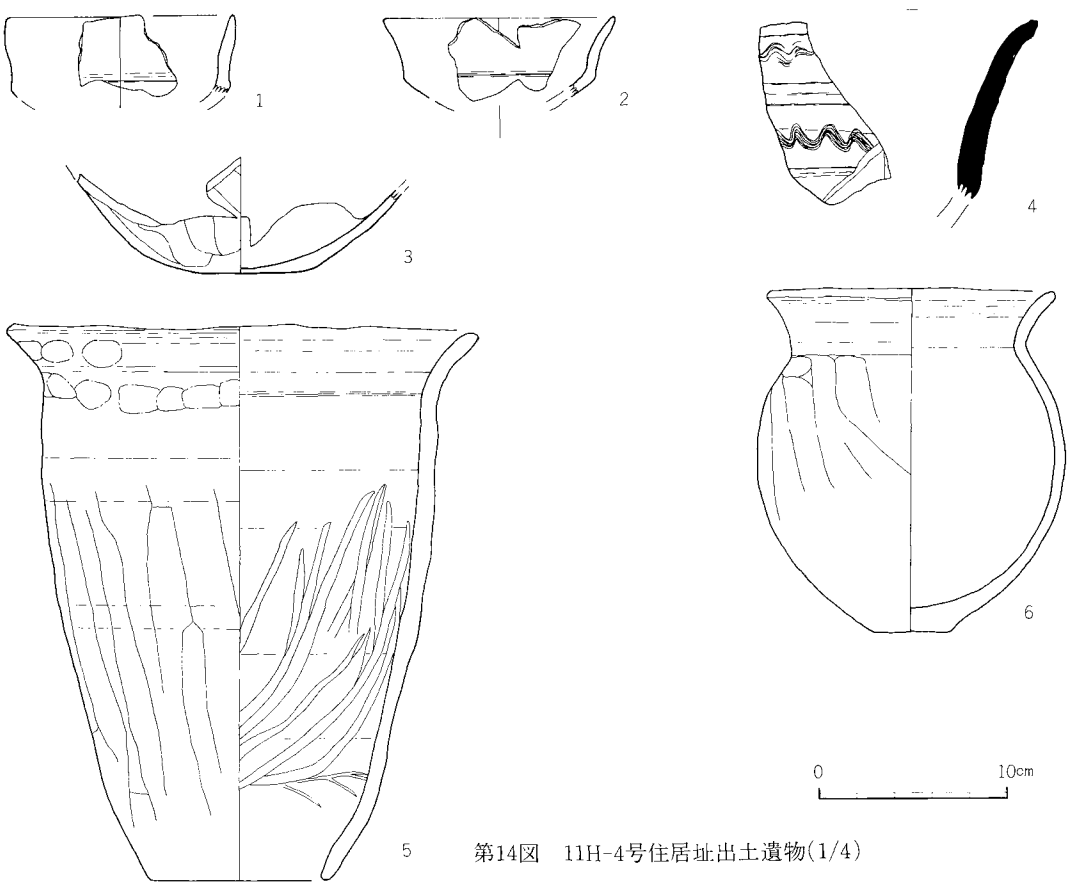


1層　暗褐色土　φ3cmのロームブロック、砂質ブロック、軽石5％含む。
2層　暗褐色土　ロームブロックを含む。軽石は含まない。

第12図　11H-4号住居址(1/60)



第13図　11H-4号住居址遺物分布図(1/80)



第14図　11H-4号住居址出土遺物(1/4)

4.　9H－3号住居址

遺　　構（第15図）

9トレンチの東端Z－3、4、Y－3、4グリッドに位置し、南壁を9H－4号住に切られ、東壁及び竈部分を9W－2号溝によって攪乱されている。平面形はほぼ正方形を呈し、主軸方位はN72°Eをとり規模は東西6.09m、南北6.59mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認壁高は30cm～40cmである。覆土は4層に分かれ、東西両端部を溝によって攪乱されている。住居内施設としては、周溝、竈、貯蔵穴、柱穴痕が確認されている。周溝は最大幅40cm、深さ1cm～3cmで四周をめぐっていたことが予想される。

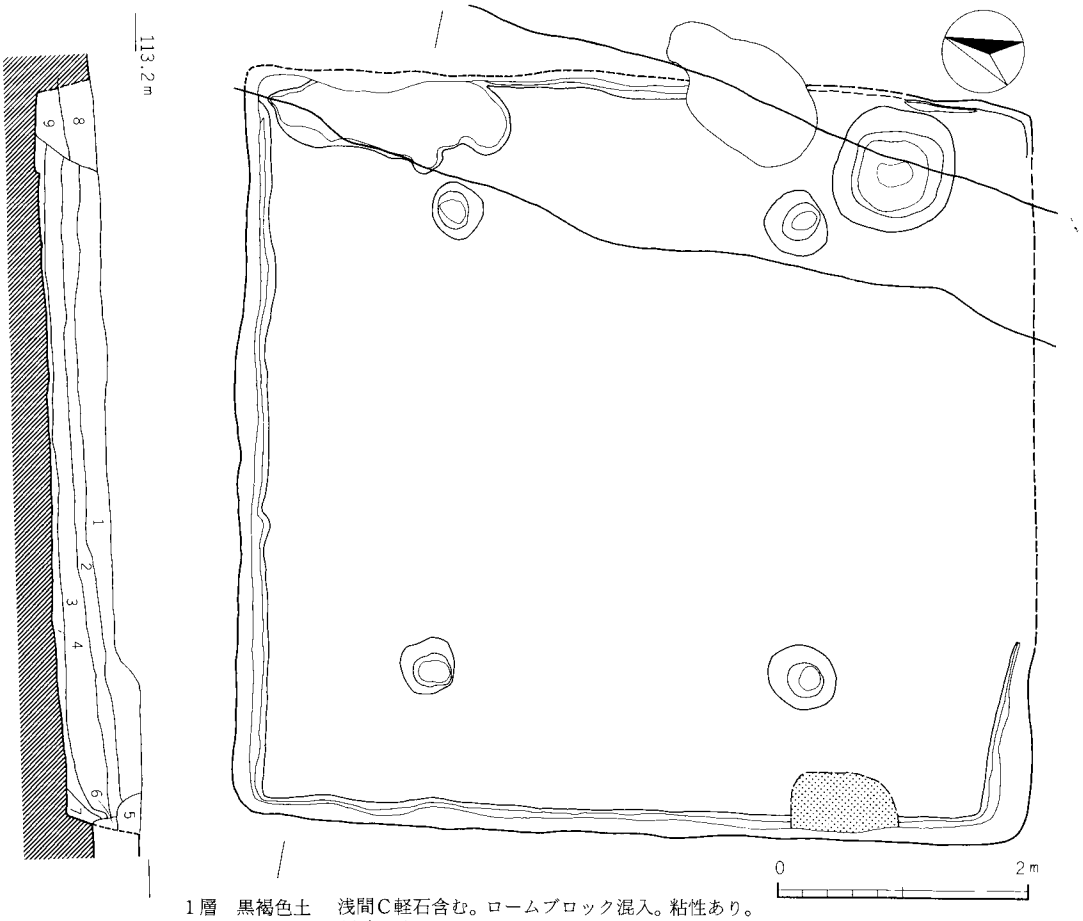
P_1～P_4 は柱穴痕で、P_1 は径47cm深さ65cm、P_2 は径57cm深さ68cm、P_3 は径50cm深さ65cm、P_4 は径45cm深さ54cmを測る。柱穴間距離は P_1～P_2 で3m、P_2～P_3 で3.65m、P_3～P_4 で2.8m、P_4～P_1 で3.65mである。P_5 は貯蔵穴と推定され、東西径1m南北径0.95m深さ63cmの隅丸方形を呈し東南隅に存在している。P_1～P_5 は対角線及び円周上にのり、整美な構築プランを示している。

床面は北東から南西に向って緩やかな傾斜をみせているが、粘質土による貼床が施され、西壁南寄りに90cm×50cmあまりの焼土塊が確認されている。

竈は攪乱を受けてほとんど残存してないが、東壁やや南寄りに付設されていたようである。

遺　　物（第17図、図版７）

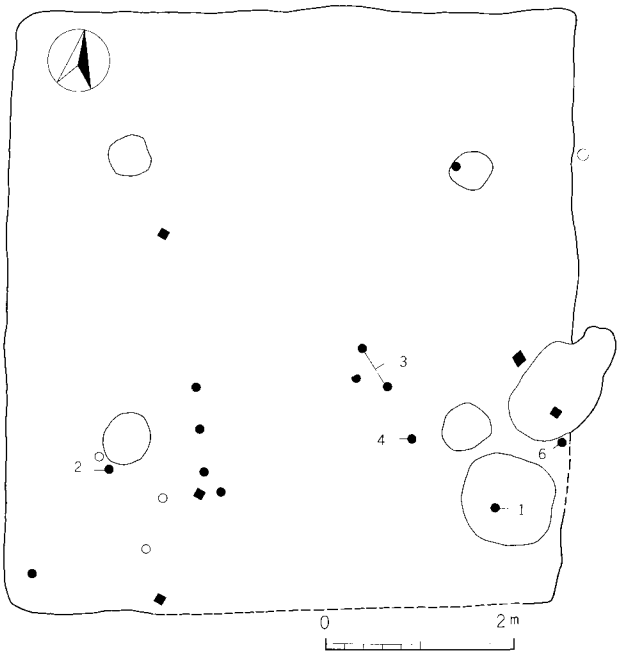
出土量は多く、大半を土師器が占めているが、大部分は破片である。そのうちでも、甕及び杯の出土量が多い。平面分布をみると、遺物の集中しているのは P_1 周辺と竈前面の２群にわかれる。遺物は大別すると土師器と須恵器がある。土師器は甕、杯、高杯、甑、脚付甕、壺があり、須恵器では杯、蓋（つまみ）高台椀が出土している。図示した内斜口縁杯１、２はどちらも内面に暗文が施されているが、１は体部がスリムにすぼまり、２は最大径を体部にもつ。５は内湾口



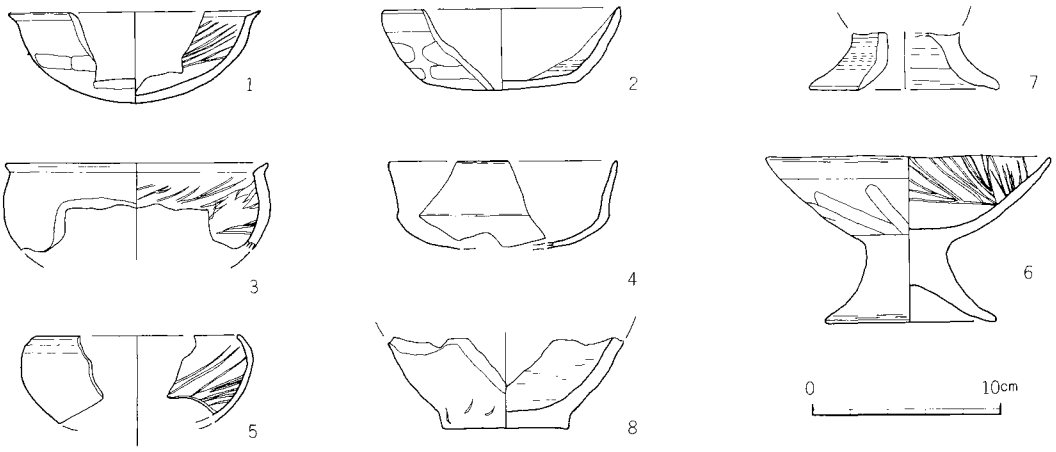
1層　黒褐色土　浅間C軽石含む。ロームブロック混入。粘性あり。
2層　黒褐色土　黒味が多く，かたくしまっている。C軽石混入。
3層　黒褐色土　黒味多く、C軽石、ローム粒が混入。締っている。
4層　黒褐色土　C軽石、ローム粒が混入。粘性があり締っている。
5層　暗褐色土　細かい白色浮石、C軽石、ローム粒を含む。
6層　暗褐色土　細かい白色浮石、ローム粒含む。粘性強くかたい。
7層　黒褐色土　黒味多く、粘性がありしまっている。
8層　暗褐色土　B軽石、C軽石混入。粘性乏しい。しまりがない。
9層　暗褐色土　C軽石少量混入。粘りがあってしまっている。

第15図　9H-3号住居址(1/60)

縁杯で口縁の内湾は強く、内面には暗文を施している。4は外稜を有する模倣杯であるが、稜はさほど明確ではない。甕8は底部を意識してひねり出しているところに特徴があり、最大径を胴部中央にもつと思われる。高杯6はいわゆる鬼高型の高杯で、内面に暗文を有し焼成も良好である。しかしながら、暗文の入り方が1、3、5の杯と逆方向であるのは興味ある事実である。なお土師杯2と脚付甕は、器形や整形から後世の所産とし、9W－2にともなうものである。



第16図　9H-3号住居址遺物分布図(1/80)



第17図　9H-3号住居址出土遺物(1/4)

5.　9H－5号住居址

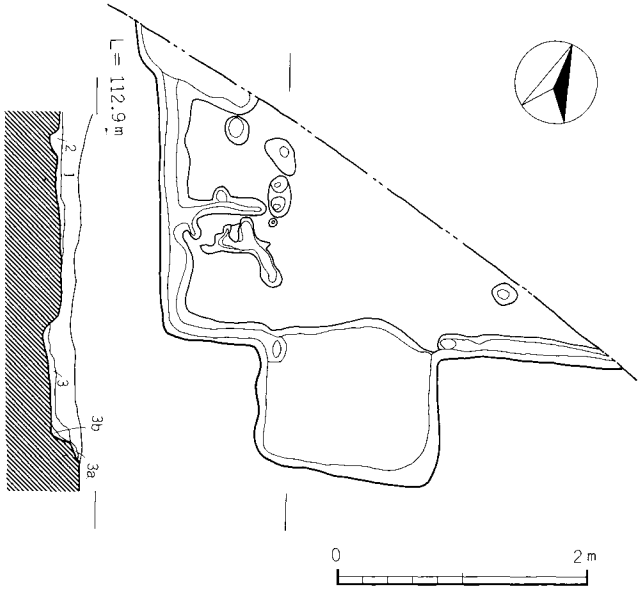
遺　　構（第18図、図版4）

9トレンチY－4グリッドに位置し、9H－3号住に接するようにして存在する。主軸方位はN68°Eをとり、規模はその大部分が調査予定地外であるために不明だが、南壁に方形の張り出しをもつ。確認壁高は西壁で20cm、南壁で5cmと浅い。覆土は3層に分けられ、第2層と第3層は同質で貼床土である可能性が強い。P_1は覆土からみて後世の攪乱であろう。周溝は最大幅30cm深さ3cm～5cmで全周をめぐっていると考えられる。張り出しは東西1.4m南北1.3mの規模であり、床面から若干の段差をもって深まっている。床面は浮石混じりの黒褐色土の貼床を施している。

竈は調査予定地外に位置すると予想されるために、全容は不明である

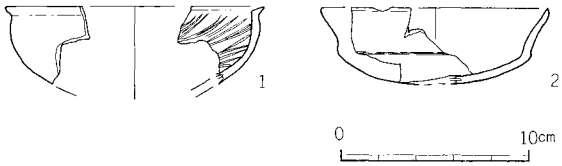
遺　　物（第19図、図版８）

43点を数え、そのほとんどが土師器で杯の出土が多い。他に編物石が８個確認されている。編物石は、南壁際にまとまって出土している。１は内斜口縁杯で内面に暗文が施されているが、胴部の張りは９Ｈ－３号住内斜口縁杯１と３の中間形態である。２は須恵の模倣杯で外稜を明瞭に有し、口縁が若干の内傾を見せる。編物石は第３表の計測表からもわかるように、重さや長さから４組のグループ分けがほぼ可能である。

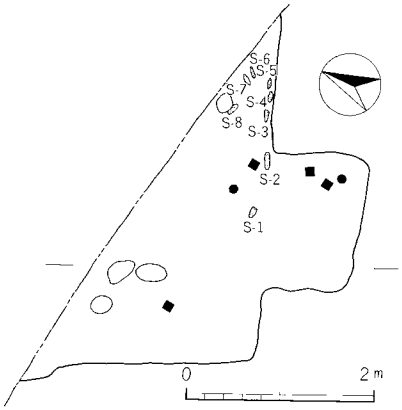


１層　黒褐色土　Ｃ軽石、ロームブロックを含む。
２層　暗褐色土　Ｃ軽石と細かい浮石を含む。
３層　黒褐色土　Ｃ軽石と白色の細かい浮石を含む
３ａ層　暗褐色土　白色の細かい浮石を含む。粘性あり。
３ｂ層　黒褐色土　Ｃ軽石と細かい浮石を含む。

第18図　9H-5号住居跡(1/60)



第19図　9H-5号住居址出土遺物(1/4)



第20図　9H-5号住居址遺物分布図(1/80)

	S 1	S 2	S 3	S 4	S 5	S 6	S 7	S 8
長さcm	16.3	26.1	25.9	13.4	14.3	14.7	27.2	23.5
幅 cm	7.8	5.5	6.5	6.6	4.8	4.7	5.8	5.4
厚さcm	4.4	6.0	4.7	4.8	4.6	5.0	4.8	4.6
重さg	760	770	820	690	480	690	690	500

第３表　９Ｈ－５号住　編物石計測表

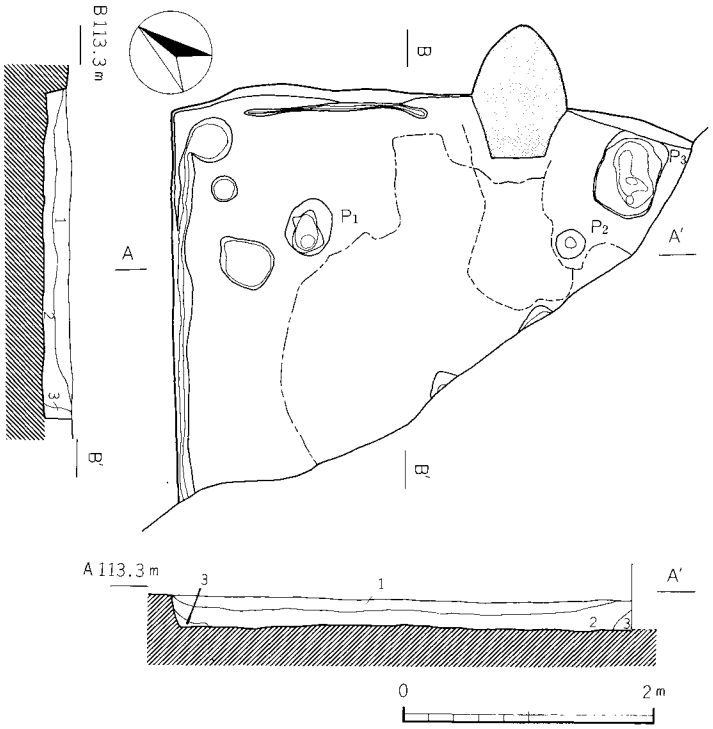
6.　10Ｈ－４号住居址

遺　　構（第21図、図版４）

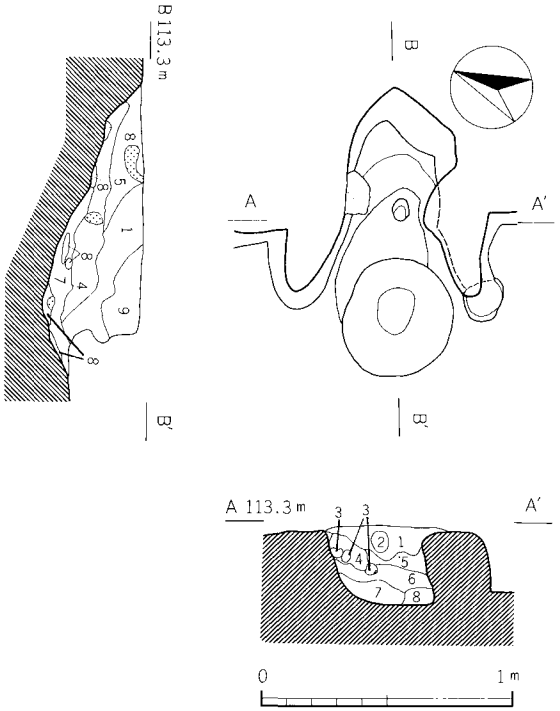
10トレンチＺ－６、Ａ－６グリッドに位置し、東５ｍには10Ｈ－３号住、西５ｍには10Ｈ－５号住がある。トレンチ調査のために南側半分が調査予定地外にあり、その全容は不明である。主軸方位はＮ54°Ｅをとり、平面形は方形を予想させ、規模は3.3m×4.1mを測ると思われる。壁は垂直気味に立ち上がり、確認壁高は25cm前後である。覆土は３層に分けられ、第一層にはCP、FP軽石の含有が多い。

竈は１基付設され、周溝は北壁から東壁沿いに幅15cm前後、深さ４cm前後を測り、周囲をめぐっ

1層　暗褐色土　ＣＰ、ＦＰを10%程度含む。粘性をもつ。
2層　黒褐色土　ＣＰを１%程度、炭化物・焼土粒を微量含む。
3層　暗褐色土　パミス含まず。軟質、若干のしまりを有する。



1層　褐色土　砂質、焼土・黄褐色ローム粒を微量含む。
2層　赤褐色土　焼土粒を多量に含む。
3層　赤褐色土　焼土
4層　褐色土　焼土ブロック及び焼土粒を多量に含む。砂質、しまりを有する。
5層　褐色土　黄褐色ローム粒の混入有。砂質で固くしまっている。
6層　黄褐色土　砂質でやや粘性有。
7層　黄褐色土　砂質で粘質で粘性有、灰の混入有
8層　明灰色土　灰。
9層　褐色土　焼土ブロック混入、黄褐色ローム粒、砂質、固くしまっている。



第21図　10H-4号住居址(1/60) 竈(1/30)

ていることが推定される。柱穴痕は4個予想できるが、P_1、P_2 が確認されているのみである。P_1 は径45cm深さ70cm、P_2 は径23cm深さ42cmを測り、P_1～P_2 の柱穴間距離は2.2mである。P_3 は貯蔵穴と考えられ、東西68cm南北50cm深さ30cmの隅丸方形を呈する。

床面は住居中央が堅緻であるが、特に堅緻な所は竈前面であり、住居全面には粘質土による貼り床が施されている。また、灰層が2cmの厚さで竈前面に、東西1.6m南北0.8mの範囲に拡がっている。

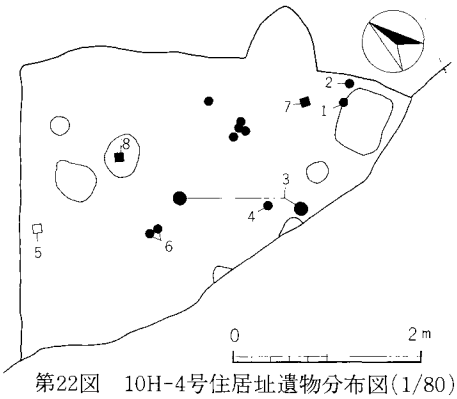
竈（第21図、図版4）

東壁中央やや南寄りに構築される。主軸方位はN68°Eをとり、規模は長さ116cm、幅80cm、壁からの掘り込みは54cmで、煙道部は45°で立ち上っている。遺存状況は良好であるといえる。

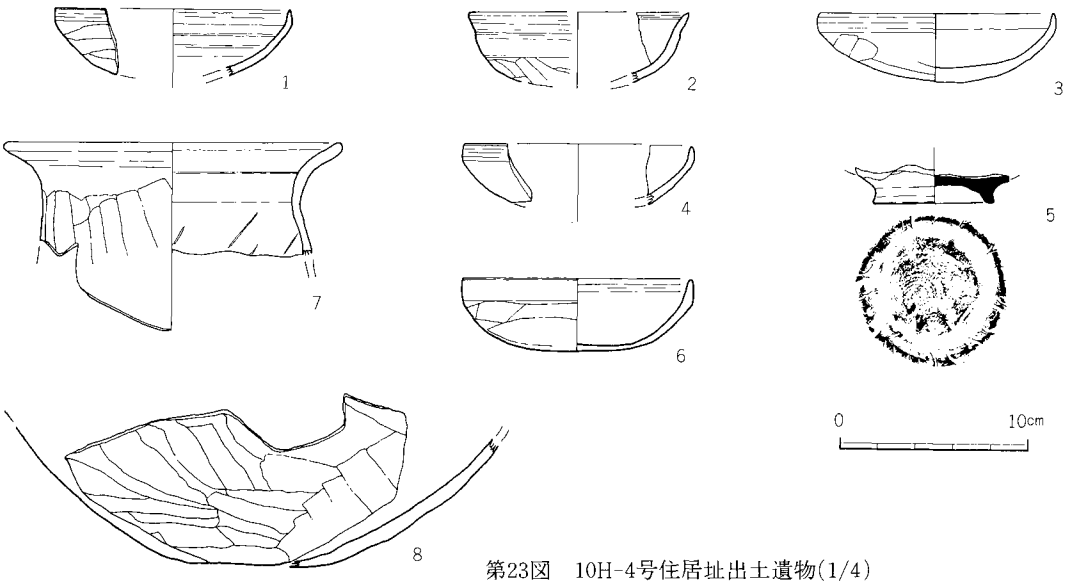
袖は粘土で形成され、右袖は長胴甕を逆位で利用している。覆土の状態からみると、天井部が落ちて埋没したようである。火床には灰が8cm程の厚さで堆積していたが、硬く焼けた火床ではなかった。

遺　　物（第23図、図版8）

出土遺物は比較的多く、その大半を土師器が占め、須恵器は高台椀底部が1点出土している。土師杯1、3、4、6は、その深さに多少の差違はあるものの内湾口縁杯とよべるものである。杯2は、体部に僅かな稜の痕跡を残し須恵模倣杯の系譜をひくものであろう。7は長胴甕であるが、8は底部のみ残存の甕であろうが、胴部のよく張ったものである。5は右回転糸切り未調整の須恵高台椀である。



第22図　10H-4号住居址遺物分布図(1/80)



第23図　10H-4号住居址出土遺物(1/4)

7. 5H—12号住居址

遺　構（第24図）

5トレンチY—10、Z—10グリッドに位置し、5H—10号住、5H—11号住を切り、5H—18号住によって住居の大部分を切られている。

主軸方位はN103°Eをとり、平面規模は東西3.25m、南北3.11mを測り、ほぼ方形のプランを呈する。壁は、遺構確認面が深かったために5cm程の僅かな立ち上がりを示す。竈が1基付設されるが、床面からの周溝、柱穴の検出はない。覆土は2層に分かれるが、地山との判別に苦慮する微妙な差である。床面はそれほど締っておらず、比較的堅いのは竈前面であるが、それとてもそれほどの締りはない。貼床は黒褐色土を用いていたようである。

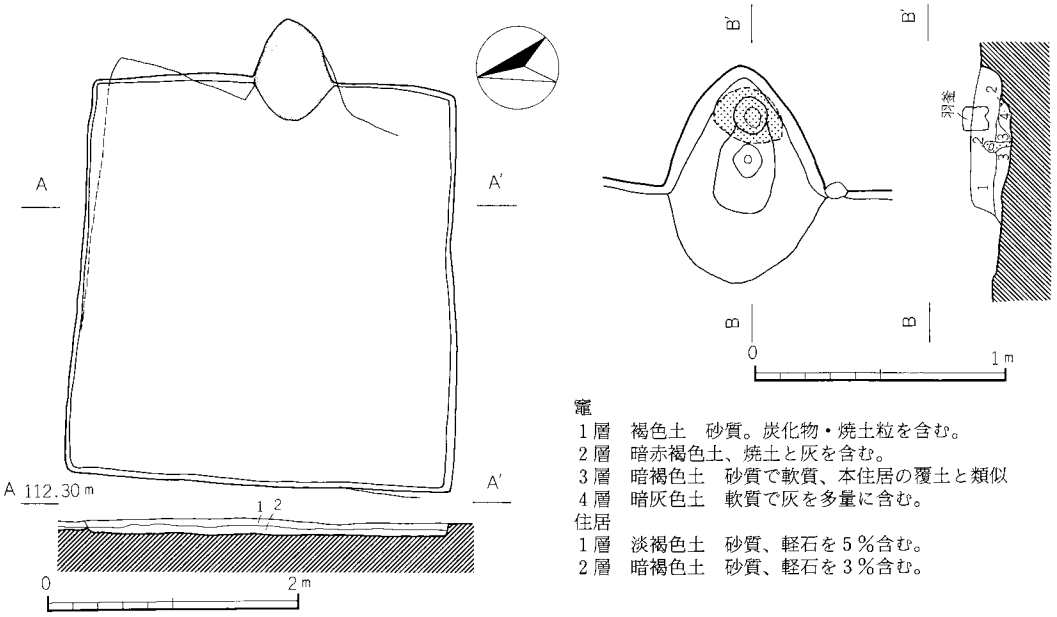
竈（第24図、図版4）

東壁のほぼ中心にあり、主軸方向はN103°Eをとる。規模は全長86cm、幅66cm、壁からの掘り込みは48cmを測る。5H—18号住の竈によって大部分破壊されているが、かろうじて燃焼部の焼土と支脚痕、右袖石に砂質凝灰岩が残存している。この砂質凝灰岩は、染谷川段丘崖に産するものと同様のもので、本遺跡地周辺では古墳時代後期（鬼高I期）から平安時代末期まで、竈構築材として利用されているものである。

遺　物（第26図、図版8）

住居址全体をより新しい時期の5H—18号住によって切られているため、残存遺物は南西隅に集中している。

出土遺物は土師器、須恵器で数も少量である。図示しえた遺物は、土師器杯1点、土師器甕2

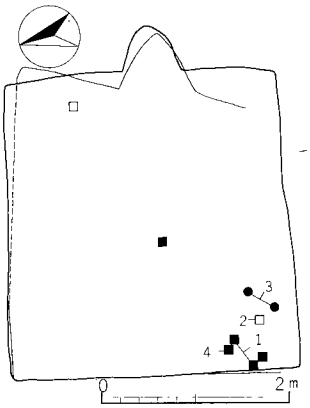


第24図　5H-12号住居址(1/60)・竈(1/30)

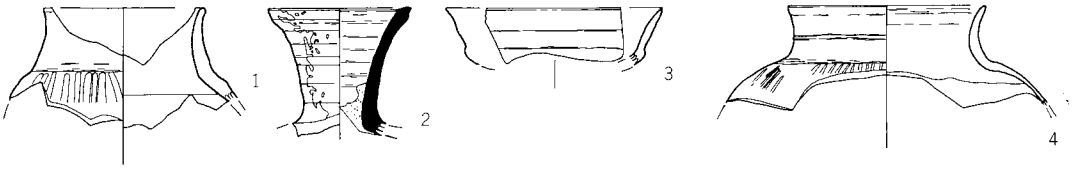
点、須恵器長頸瓶の頸部１点の計４点である。

３は須恵の模倣杯で、図上復原であるが、口辺が外傾し体部にケズリが入り、口辺にくらべて体部の薄い器形が予想される。また体部外面には僅かに稜線の面影をとどめている。１、４はどちらも口辺が立ち肩部に横ケズリを有する甕だが、４においては口縁が外反し、肩部から胴部にかけてよく張った器形が予想される。

これらの甕は、底部が残存してないので確実なことはいえないが、残存している上半部の器形から一応脚付甕としておきたい。２の須恵長頸瓶は、断面が灰紫色になるほどに堅く焼き締められ、外面には自然釉がかかっている。器形は頸部から口縁にかけて外反し、口唇部は平らに調整されている。



第25図　5H-12号住居址遺物分布図(1/80)



第26図　5H-12号住居址出土遺物(1/4)

0　10cm

8.　５Ｈ－８号住居址

遺　　構（第27図、図版３）

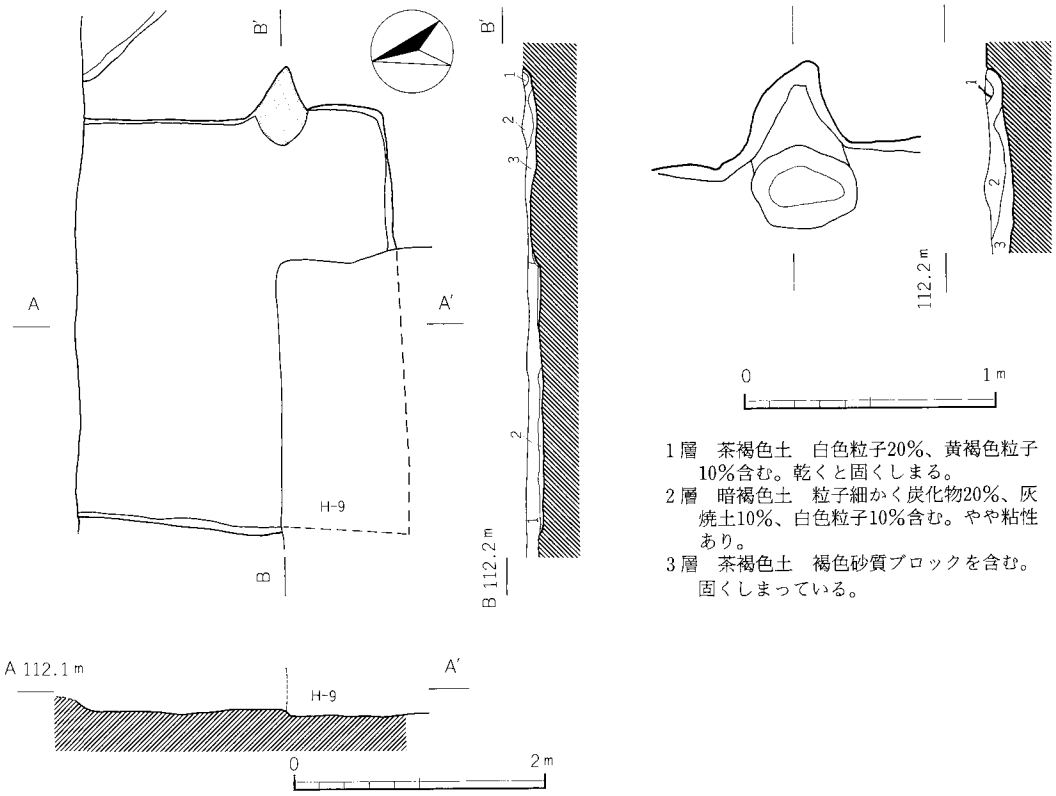
５トレンチ東のＹ－11、12グリッドに位置する。５トレンチ全体の遺構確認が困難であったために、本住居址も床面近くまで遺構確認作業を続けてやっと確認できた。そのため、遺構の残存状態は良くない。５Ｈ－12号住の東５ｍのところに存在し、５Ｈ－９号住に切られている。主軸方位はＮ99°Ｅを示し、平面規模は東西3.4mを測るが、北壁が調査予定地外であるため南北は不明である。壁は覆土と地山が類似した土質であるため検出が困難であったが、東壁は明瞭に確認された反面西壁は不明瞭であった。遺構確認面からの壁高は東壁で10cmを測る。

覆土は２層よりなるが、地山との判別が困難なほどに類似している。また、竈燃焼部のレベルから考えると覆土第２層と第３層は、貼床と考えた方が妥当かもしれない。

柱穴、周溝はない。床面は比較的堅く締っており、特に竈前面が堅緻で、厚さ10cmの貼り床が施されていた。

竈（第27図）

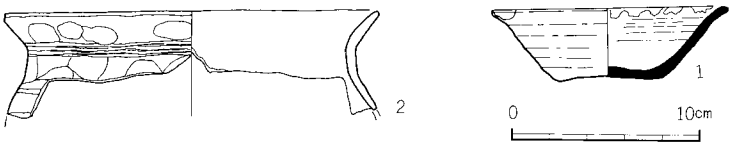
東壁南寄りに構築され、主軸方位Ｎ104°Ｅをとり、規模は長さ67cm、幅50cm、壁からの掘り込みは36cmを測り、煙道部は40°で立ち上がる。遺存状態は、上部削平を受けているために不良である。燃焼部は壁外に位置しているが、ほとんど焼けておらず、覆土に灰と若干の焼土がみられる。竈前面の楕円形の落ちこみは、灰掻き穴と考えられる。



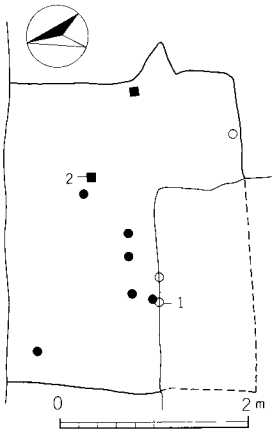
第27図　5H-8号住居址(1/60)・竈(1/30)

遺　　物（第28図、図版８）

平面分布は住居中央に集中しており、土器片約100点を記録している。土師杯、甕を中心に焼きの甘い須恵器杯も数点出土している。図示した須恵杯１は器高が低く、口径、底径ともに大きく、口縁が外反した杯で、右回転糸切り痕を底部に有している。また口縁内面には油煙状のものが付着している。２の土師甕はコの字状口縁を呈し、器肉が薄くコの字を明瞭に意識させるために、くびれの上下を強くなでて区画している。整形は肩部横方行ヘラケズリで、最大径を胴部中央にもつと予想される。図示した土器は僅か２点であるがその特徴から、清里、陣場編年における第２期土器群に類似している。



第28図　5H-8号住居址出土遺物(1/4)



第29図　5H-8号住居址遺物分布図(1/80)

9.　5Ｈ―18号住居址

遺　　構（第30図、図版２）

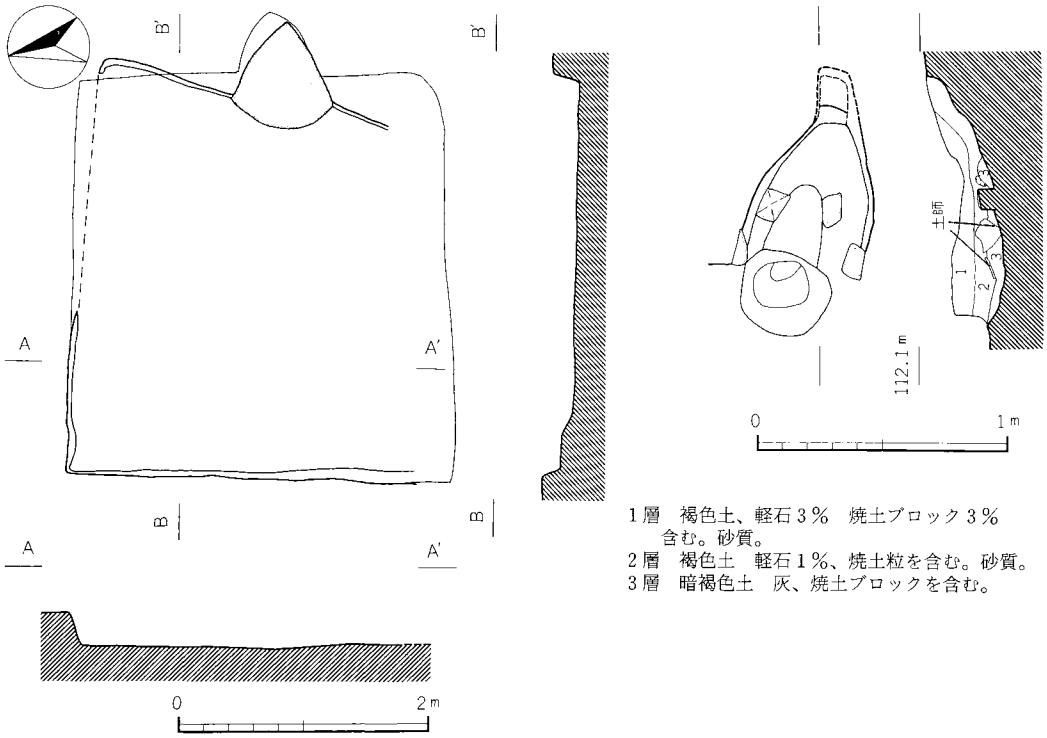
５トレンチＺ―10グリッドに位置し、５Ｈ―10号住を切りこんで構築されている。東５ｍには５Ｈ―８号住と５Ｈ―９号住、西５ｍには５Ｈ―３号住がある。遺構範囲については、かなりの攪乱を受けているために明瞭でない。平面形は不整長方形と考えられ、規模は推定で東西3.3m南北2.8mを測り、主軸方位はＮ104°Ｅをとる。確認された壁は、東壁、西壁と北壁の一部で、それとてもかなり不明瞭である。床は貼床でなく地山床で、堅緻な部分は竈前面にみられる。遺物は住居址全面に散布している。

竈（第30図、図版２）

東壁ほぼ中央に５Ｈ―12の竈を切って築成されている。主軸方位はＮ119°Ｅをとり、規模は長さ107cm、幅56cm、壁から掘り込みは78cmを測る。なお、煙道部からの立ち上がり角度は72°である。両袖には川原石を配し、支脚にも２個の川原石を用いている。それらは、どれも川原石を半分に打ちかいて利用している。燃焼部はかなり焼けており、灰層の堆積が若干みられる。また、燃焼部から羽釜と土師質土器が出土している。

遺　　物（第32図、図版８）

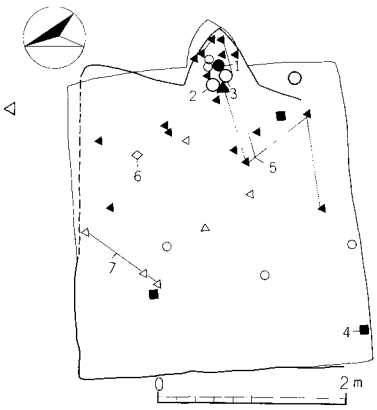
出土遺物は300点余の土器片が記録されている。土師甕、土師脚付甕、羽釜、土師質高台椀、灰



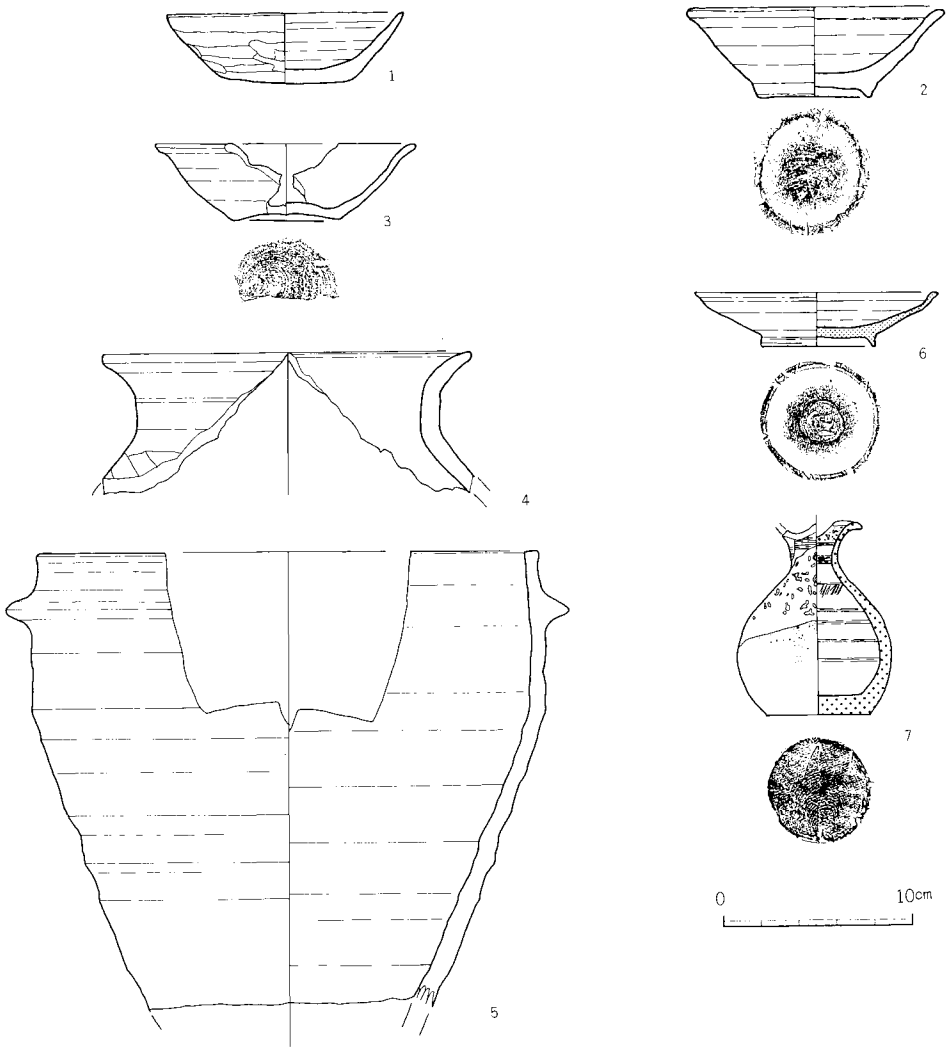
第30図　5H-18号住居址(1/60)・竈(1/30)

釉陶器、緑釉陶器等器種の変化に富んでいる。平面分布は、住居址全面に亘り、特に羽釜の分布は竈内を中心に竈前面に展開している。

土師杯1は、口縁ナデで体部全面にケズリが施されている。2、3は土師質土器で、2は高台椀、3は杯である。どちらも、底部に右回転糸切り痕を有している。羽釜5は、酸化炎焼成で体部がこけている。6は緑釉皿であるが、胎土は須恵器を思わせるものであり、底部はヘラ調整を施してある。7は灰釉小瓶で、本来は手付水注としてあったものが、10世紀後半以降、肩の注口が付けられなくなったものである。



第31図　5H-18号住居址遺物分布図(1/80)



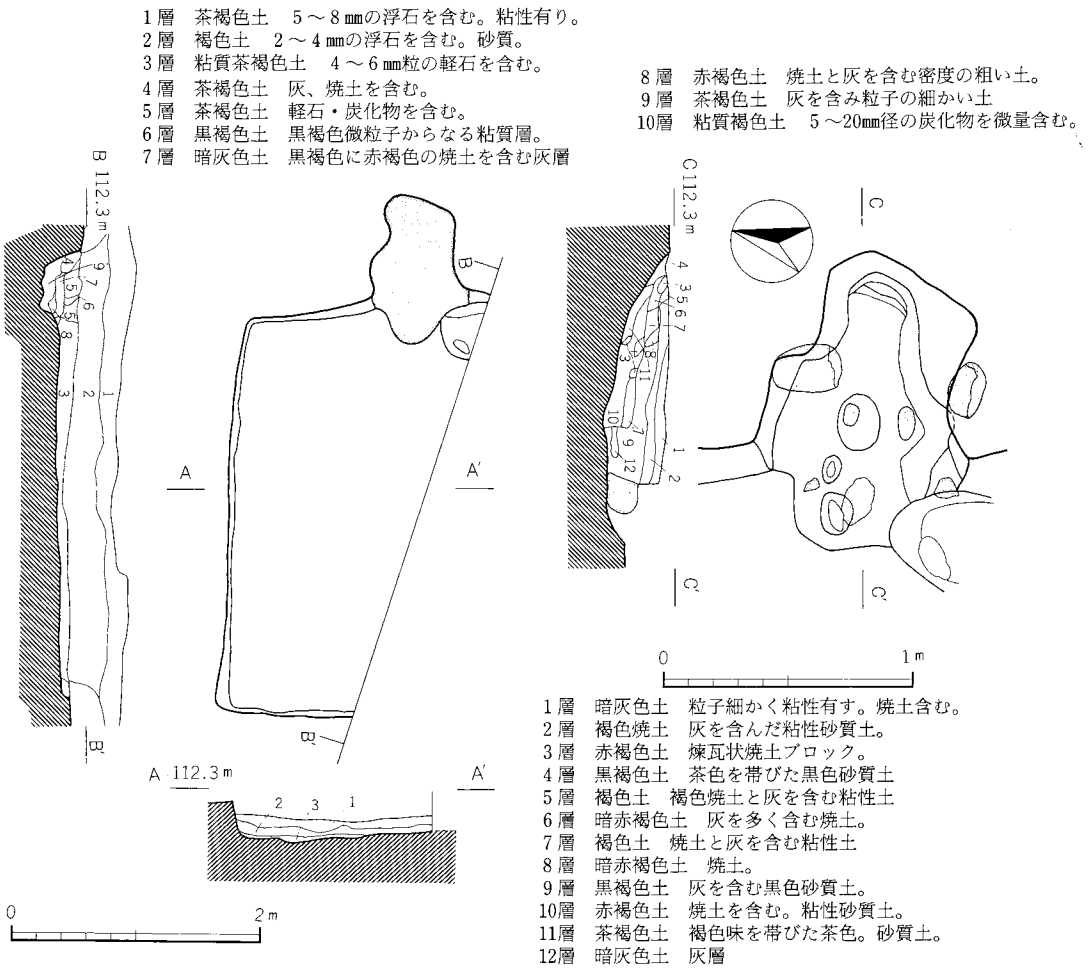
第32図　5H-18号住居址出土遺物(1/4)

10.　5Ｈ―14号住居址

遺　　構（第33図、図版３）

５トレンチの西部分Ｚ―５、６グリッドに位置する。５Ｈ―23号住と北東隅を接するようにし、西５ｍには５Ｈ―17号住がある。全体の３分の１は調査予定地外に存在するが、遺構確認面が高かったために、５トレンチの中では比較的遺構の遺存状態は良好であった。平面規模は東西3.44ｍが測れるのみである。主軸方位はＮ118°Ｅをとり、プランは縦長長方形であろう。

確認面からの壁高は35cmあり、壁はほとんど垂直に立ち上がっている。覆土は４層に分けられ竈全面に攪乱を受けてはいるが、その他は自然堆積を呈している。



第33図　5H-14号住居址(1/60)・竈(1/30)

床は竈前で攪乱による砂地の軟質土がみられるが、他は粘質土による貼床が施されている。また、床面で特に堅緻なところはみられない。遺物分布は、竈内に集中している観がある。

竈（第33図、図版３）

東壁南寄りに構築されている。主軸方位はN93°Eをとり、住居の方位とは若干方位を異にする。遺存状況は比較的遺構確認面が高かったために良かったが、遺構確認作業中に川原石の竈構築材が原位置から動いてしまっている。規模は長さ118cm、幅86cm、壁からの掘り込みは76cmを測り、煙道部は33°の角度でなだらかに立ち上がっている。右袖は攪乱を受けているが、かろうじて残存している部分には、砂質凝灰岩の切石を使用している。竈構築材には川原石を大幅に利用しており、支脚にも２個の川原石を使用している。２個支脚の例は、５Ｈ―18号住にもある。

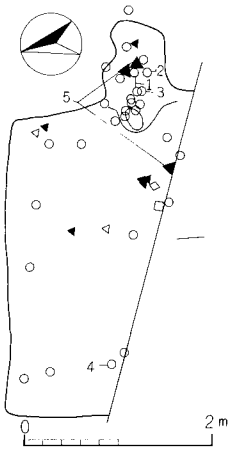
竈内遺物としては、羽釜と須恵高台椀が多く出土している。

遺物（第35図、図版９）

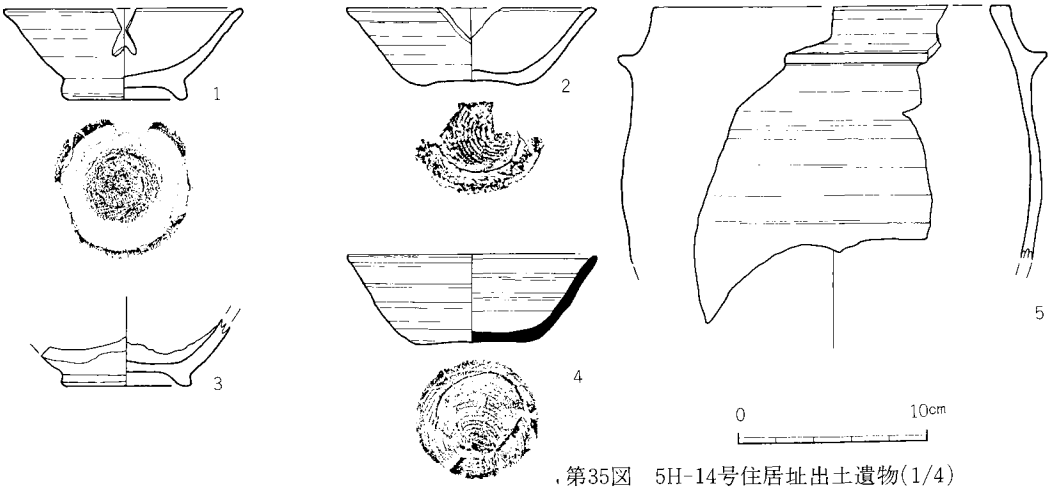
平面分布をみると、遺物の出土は住居址全面に亘っている。特に羽釜は、竈内及び竈前面に分布しており、煮沸用具としての利用が頷ける。出土遺物は、羽釜、土師質高台椀と杯、須恵杯、灰釉陶器があり、土師器はほとんど姿を見せない。

竈内出土の土師質高台椀１は、右回転糸切り未調整の後、付高台をして器形を整えている。土師質杯２は、１の体部は同形であるが、右回転糸切り未調整の後に高台の貼付がなかったものであろう。

３も竈内出土の土師質高台椀としたが、酸化炎焼成であることは明瞭だが、焼きは須恵器の肌合いをもつ。４は右回転糸切り未調整の底部を有する須恵杯である。まぎれもなく還元炎焼成であるが、軟質で焼きがあまい。羽釜５は酸化炎焼成で、器形は５Ｈ―18号住出土の羽釜５と比較すると体部が張っており、後出の要素を示すものであろう。



第34図　5H-14号住居址遺物分布図(1/80)



第35図　5H-14号住居址出土遺物(1/4)

11. 10H－3号住居址

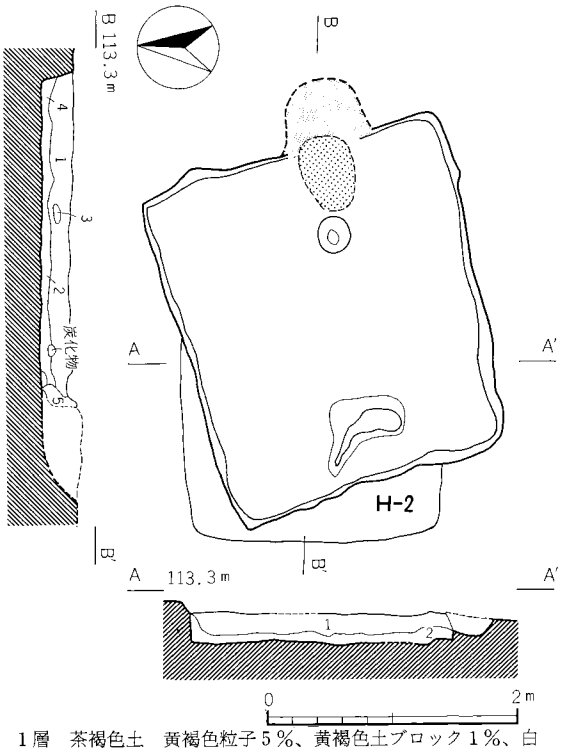
遺構（第36図、図版５）

５トレンチＺ－７、８グリッドに位置する。10H－２号住によって切りこまれた本住居址は、竈部分を攪乱されて、南壁を10H－１号住と接し、西５mには10H－４号住が存在する。主軸方位はN71°Eをとり、平面形は縦長長方形である。規模は東西2.87m、南北2.54mを測り、南西コーナーが若干内側にはいったプランである。確認壁高は20cmで、壁は垂直に立ち上がっている。

覆土は２層に分けられるが、地山と酷似した土層であったため、壁の検出に苦慮した。竈前面には、P_1 が径28cm、深さ15cmの規模であり、西壁に沿って長さ80cm、幅40cm、高さ15cmの馬蹄形状の高まりが存在する。これは位置や形状から入口状遺構の高まりと類似しているが、管見するところでは平安時代住居址についての報告例はない。

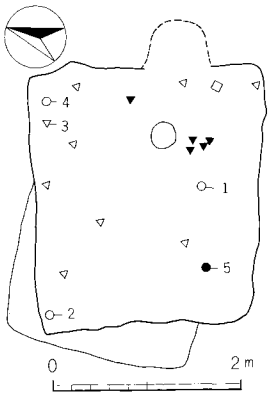
竈　東壁中央やや南寄りに存在したと推定されるが、ほとんど10H－２号住によって破壊されており、竈前の床面に焼土と灰が貼りついているのみである。

遺物（第38図、図版９）　出土遺物は北壁沿いに灰釉陶器の散布があり、P_1 周辺には羽釜が集中しているものの、遺構全体に亘って散布している。出土土器は、図示しなかった羽釜も含めて、土師質高台椀、灰釉陶器がある。１、２、４は高台椀であるが、１、４は高台部が長く、土師質高台椀としても特徴のあるものである。２は高台部が比較的１、４にくらべて短いが、高台椀としては一般的なものである。３は高台部が欠損しているものの、器形からいっても灰釉高台椀であろう。かなり大形のもので、釉はドブ漬けでかけられている。

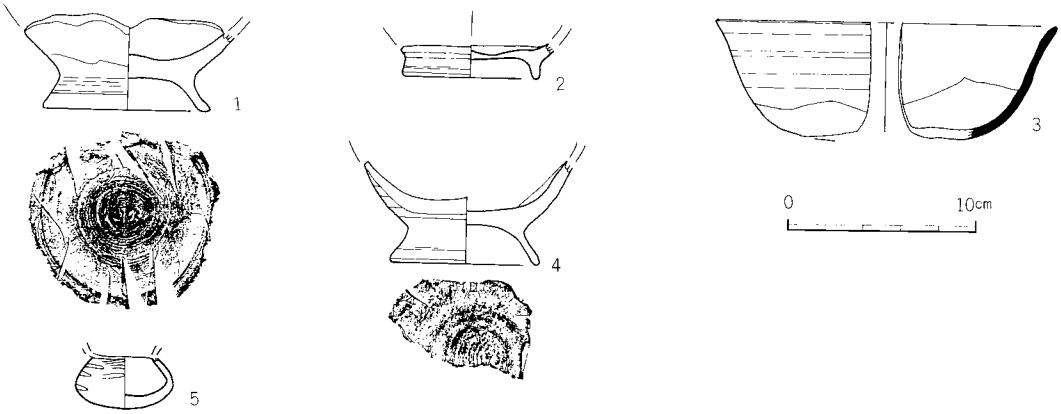


1層　茶褐色土　黄褐色粒子５％、黄褐色土ブロック１％、白色粒子１％。砂質軟かい。
2層　茶褐色土　やや黒味がある。黄褐色粒子５％・黄褐色土ブロック１％、白色粒子１％含まれる。
3層　黄褐色土　ロームブロック50％含む。
4層　赤褐色土　焼土粒・焼土ブロック80％、ガサガサしてる。
5層　茶褐色土　炭化物２～３％含む。やや粘性あり。

第36図　10H-3号住居址(1/60)



第37図　10H-3号住居址遺物分布図(1/80)



第38図　10H-3号住居址出土遺物(1/4)

12.　9Ｈ－１号住居址

遺構（第39図、図版５）

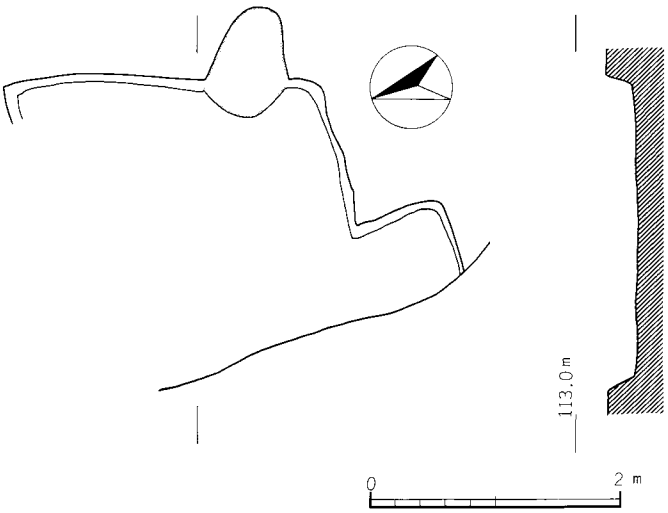
９トレンチＺ－２グリッドに位置する。９Ｈ－３、４号住居が埋没した後にその上に築成されより新しい時期の９Ｗ－２号溝によって西側部分を切られている。すぐ東には、竈の煙出し部を切って、９Ｗ－１号溝が存在している。主軸方位はＮ104°Ｅをとるが、上部攪乱を強く受けているため遺存状態は極度に悪い。平面形は南壁に張り出しをもつ歪んだ長方形と推定される。確認壁高は東壁で15cm、南壁で僅か５cmを測る。床は粘質土で貼床している。

竈は東壁南寄りに設置され、主軸方位Ｎ107°Ｅ、規模長さ86cm、幅28cmをとり良く焼けている。

遺物（第41図、図版９）

出土遺物は、上部削平を強く受けているため僅少である。１は灰釉短頸壺とよぶべき器形だが類例はない。胎土は灰釉にしては良好とはいえないが、濃緑色の釉が肩から胴にかけて流下している。底部は粗い調整であるがヘラによる調整が施されている。

その他に、竈内から須恵大甕破片３が出土している。



第39図　9H-1号住居址(1/60)

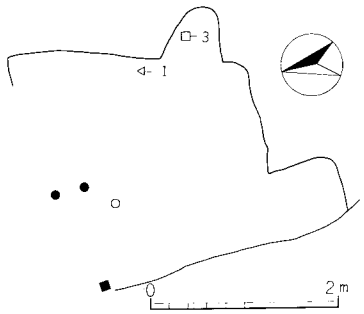
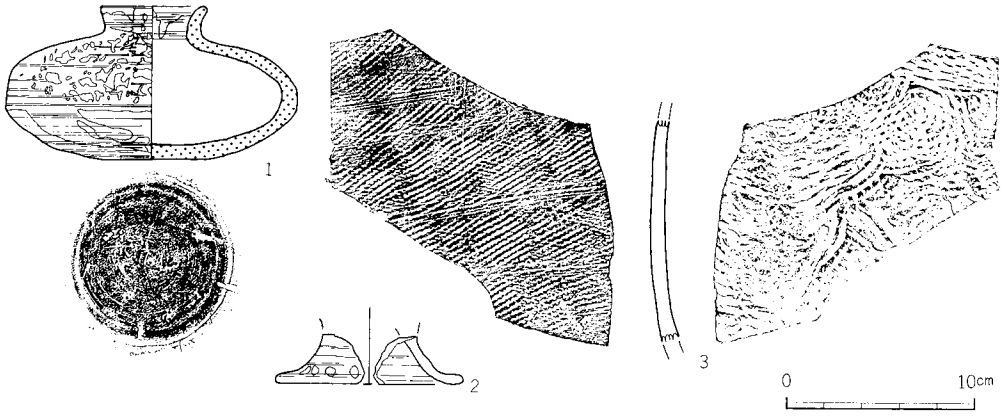


図40図　9H-1号住居址遺物分布図(1/80)



第41図　9H-1号住居址出土遺物(1/4)

13.　9Ｈ－8号住居址

遺構（第42図）

9トレンチＹ－6グリッドに位置する。北側ほぼ4分の1を調査予定地外へ突出させている。主軸方位はＮ95°Ｅをとり、平面形は縦長長方形と思われ、規模は東西3.09mを測るが南北は不明である。壁は緩やかに45°の角度で立ち上がり、確認壁高は南壁で15cm前後である。覆土は1層しかないが、地山との判別が非常に困難であった。

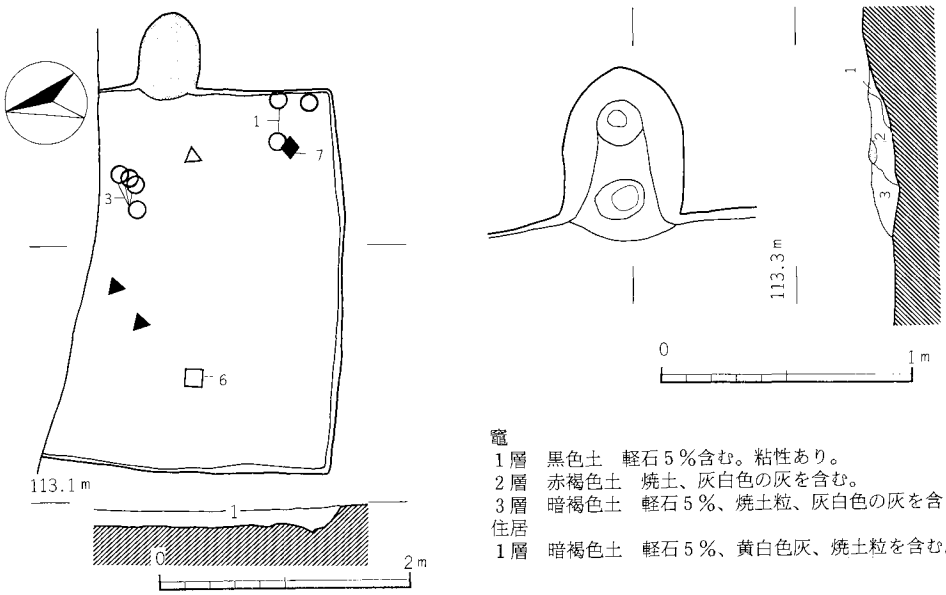
住居内施設としては、竈が1基付設されるが、貯蔵穴、柱穴、周溝は確認されない。床面は比較的平坦であり、特に堅緻な部分は認められない。

竈

東壁中央にあり、主軸方位はＮ19°Ｅをとる。規模は長さ70cm、幅50cm、壁からの掘り込みは60cmを測る、燃焼部には焼土と灰がかなり厚く堆積しており、煙道部は19°の角度をもって緩やかに立ち上がっている。燃焼部中央には支脚痕と考えられるものが、壁から50cmの位置に存在する。竈構築材に砂質凝灰岩を使用したと考えられるが、その証左として、南壁に密着した砂質凝灰岩と竈上面にのっていた砂質凝灰岩の存在があげられる。

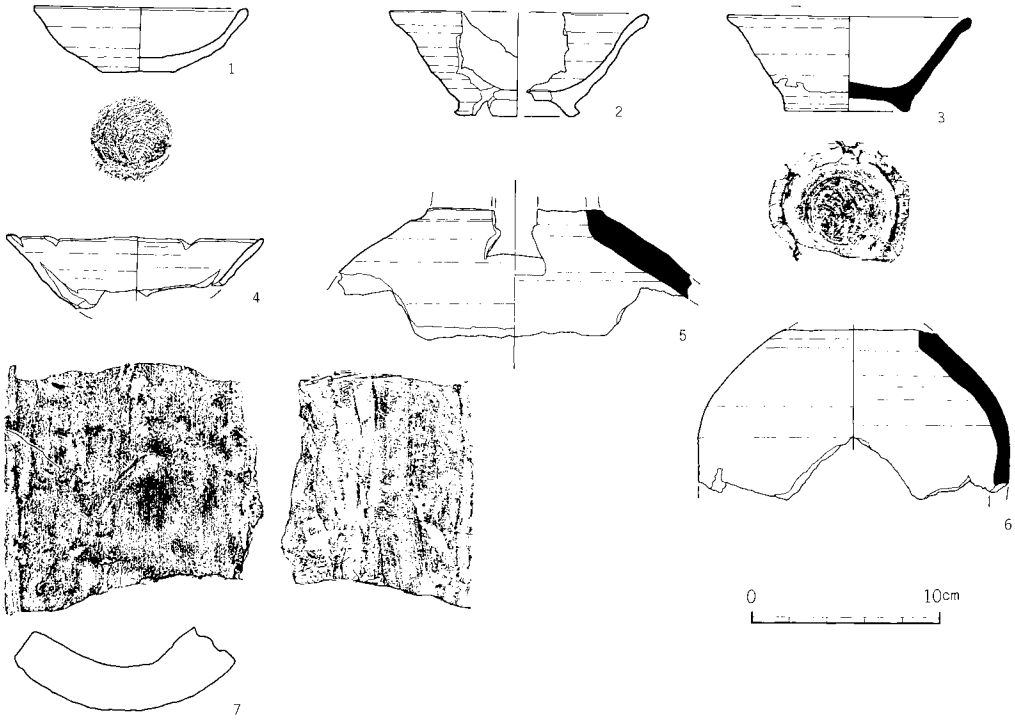
遺物（第43図、図版9）

遺物の出土量は比較的多く、平面分布は東南コーナーと竈前面及び住居址西半に集っている。遺物は大別すると、土師質土器、須恵器、羽釜、灰釉陶器、瓦である。1は土師質杯で右回転糸切り未調整で、カワラケ状である。2、4は土師質高台椀であろう。2は丸味をもった体部を有し、器形からいっても土師質高台椀といえるだろう。3は須恵高台椀で、2の土師質高台椀と比較すると、須恵器らしい直線的な体部をもっている。焼成があまく、軟質灰白色須恵器ともよべるものである。5、6は須恵小甕で、大小はあるものの器形は同タイプと考えられるが、欠損部分が多く定かでない。7は丸瓦の1部であろう。裏に若干のしぼり目があるように見うけられるがたしかでない。



竈
1層　黒色土　軽石5％含む。粘性あり。
2層　赤褐色土　焼土、灰白色の灰を含む。
3層　暗褐色土　軽石5％、焼土粒、灰白色の灰を含む。
住居
1層　暗褐色土　軽石5％、黄白色灰、焼土粒を含む。

第42図　9H-8号住居址(1/60) 竈(1/30) 遺物分布図(1/80)



第43図　9H-8号住居址出土遺物(1/4)

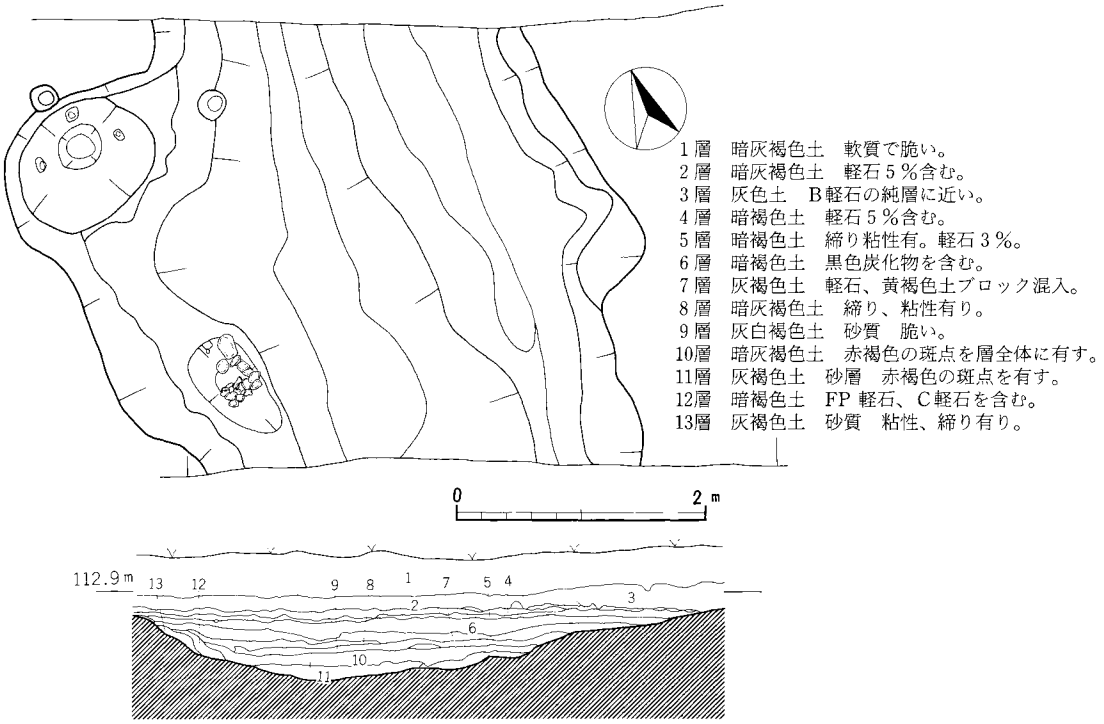
14. 溝（8W－1、6W－1、9W－1～3、11W－1，11W－3）

a　8W－1号溝（第48図、図版2）

8トレンチZ－21、22、23、A－21、22、23グリッドに位置する本大溝は、6トレンチ、11トレンチ、13トレンチでも確認され、N104°Eの方向性をもって南北に走り調査地外へ延びている。大溝は、いわば北から南へ緩かやにくだる微高地を南北に切り裂くように走っており、現在の畑地の地割と符合する面を多分にもっている。

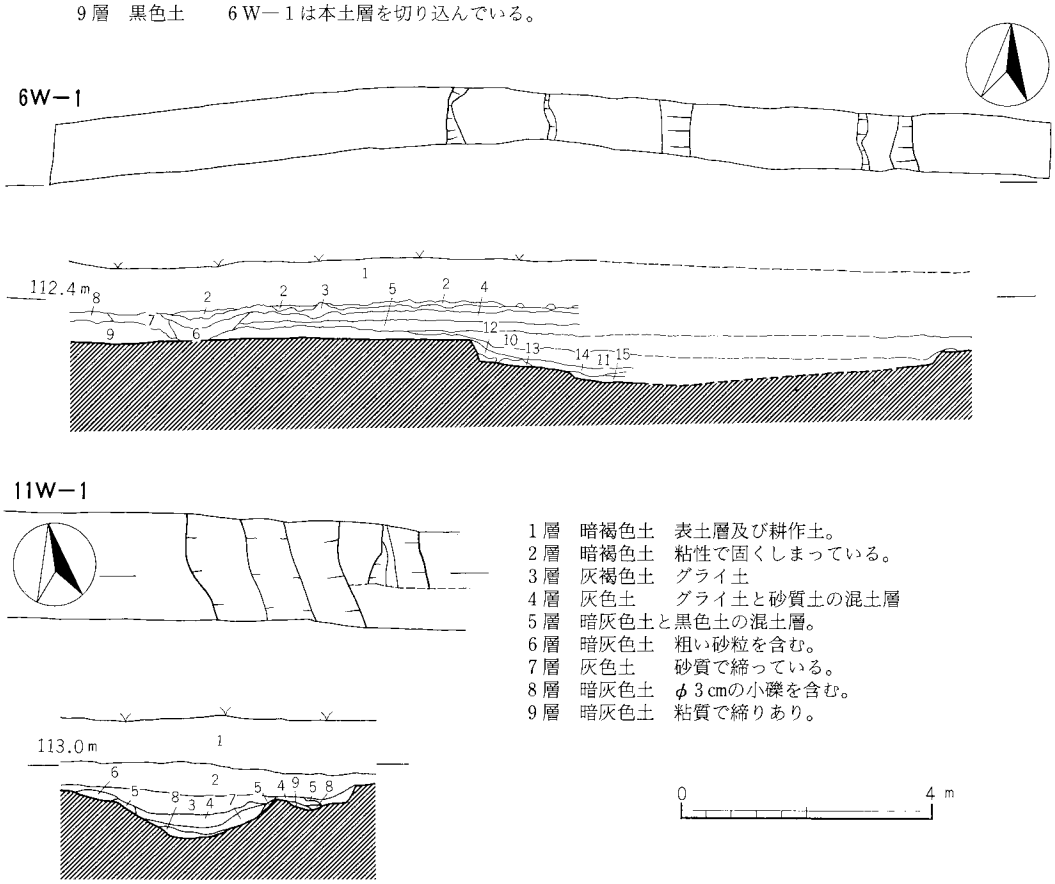
平面規模は幅約7.2m、深さは確認面から1.2m、現地表から2mを測る。大溝の西肩部は、一旦45°の角度で落ちこみ、それから平坦面を形成し緩やかに底部に至っている。それに対して東の落ちこみは、肩部から緩やかに下りはじめ、途中で浅い溝状遺構を残しながら、ほぼ30°の角度で底部に至る。溝内には、井戸状遺構（8Ⅰ－1号溝として後述）と集石遺構（後述）が、あたかも併立するかのように存在している。

大溝の覆土は、20層に細分できる。特徴をもつ土層としては、第3層と第8層があげられる。第3層はかなり浅間B軽石の純度の高い土層であり、これで大溝の下限は特定できる。第8層は黒色灰を多量に含有する土層で、この層を境にして覆土の様相にちがいな顕われる。それは、第8層よりも下位の土層は水の影響を多分に受けており、第10層から第11層までの時期には、大溝では水流豊かに南流していた様子が看取できる。また、第9層の時期にはかなり大溝も埋没して



第44図　8W－1号溝（1/120）

1層　暗褐色土　耕作土層
2層　暗紫色土　B灰を含む。
3層　暗灰色土　青灰色ブロックを含む。
4層　褐色土　粘性締りあり。
5層　暗褐色土　F軽石を少量含む。
6層　暗褐色土　6W－2の含土。
7層　暗褐色土　粘性あり。軽石を少量含む。
8層　黄褐色土　砂質で粘性と締りを合わせもつ。
9層　黒色土　6W－1は本土層を切り込んでいる。
10層　暗灰褐色土　6W－1の上部覆土。
11層　暗灰褐色土　締りと粘性をもつ。
12層　灰褐色土と明灰黄褐色土の混土層。
13層　明灰黄褐色土　砂質ローム
14層　灰褐色土　13層に砂の混じった層。砂質。
15層　暗灰色土　砂質、14層より粒子の細かい砂。



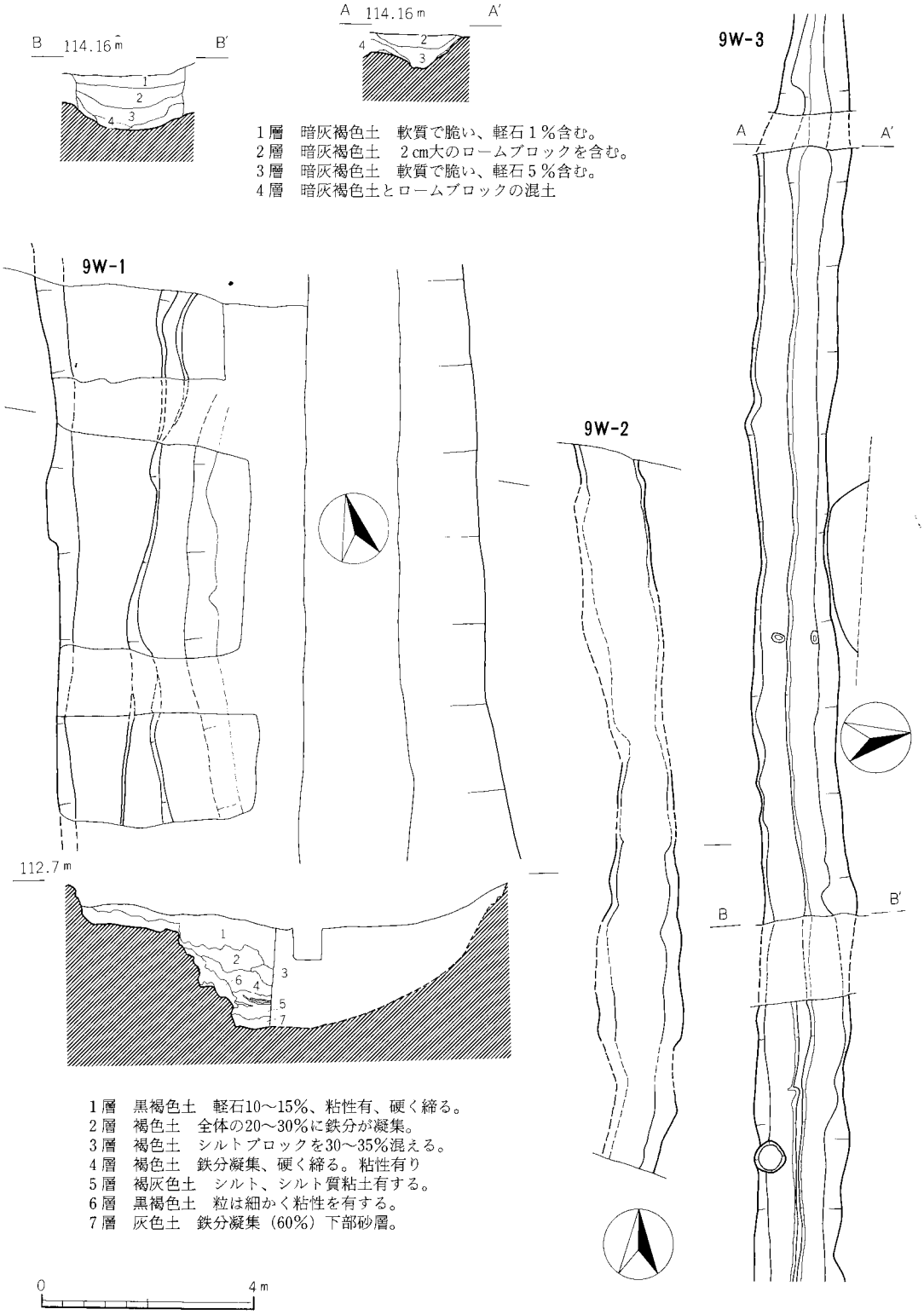
1層　暗褐色土　表土層及び耕作土。
2層　暗褐色土　粘性で固くしまっている。
3層　灰褐色土　グライ土
4層　灰色土　グライ土と砂質土の混土層
5層　暗灰色土と黒色土の混土層。
6層　暗灰色土　粗い砂粒を含む。
7層　灰色土　砂質で締っている。
8層　暗灰色土　φ3cmの小礫を含む。
9層　暗灰色土　粘質で締りあり。

第45図　6W－1、11W－1号溝（1/120）

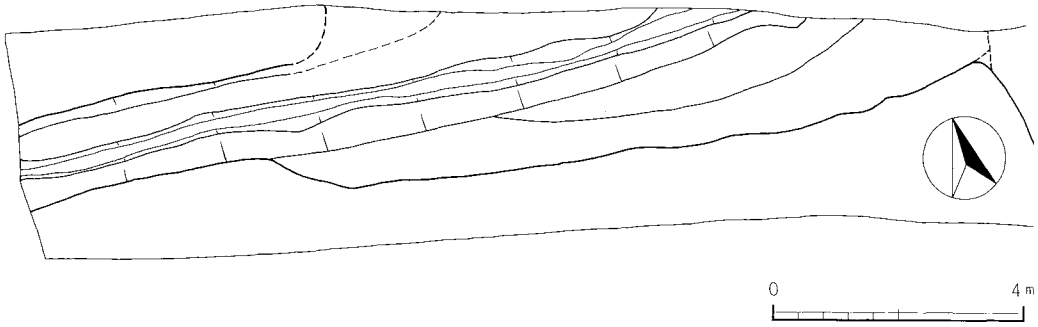
きており、水はそれほど流れずに水たまりの状態が多かったようである。そして、第10層に至って恐らく天災によるものであろう黒色灰層の堆積があったと推定される。8W－2号溝は、第10層とほぼ同時期に掘削されたと考えられる。その後、浅間B軽石層降下時期を経て今日まで、大溝埋没後この土地は耕作地として利用されてきたのである。

遺物（第48・49図、図版10）

出土遺物を垂直分布的に見ていくと、密度の濃い遺物包含層が2枚あることに気づく。1つは第10層の黒色灰層を中心とした1群であり、1つは大溝底部に近いところに分布する1群である大溝底部付近の遺物群をA期、第10層を中心とした遺物群をB期とする。A期では、土師器、須恵器、緑釉の出土があり、B期は羽釜、灰釉陶器、土師質高台椀等の出土が顕著であった。



第46図　9W-1～3号溝(1/120)



第47図　11W-3号溝(1/120)

図示した土器群は、そのほとんどがB期に属し、A期の土器は1、7、11が出土している。

b　6W－1号溝（第45図、図版2）

6トレンチ東端のZ－15、A－15グリッドに位置する。本大溝は8W－1号溝の延長部分であり、規模は幅7.5m、深さ1m（現地表面より2m）を測り、8W－1溝と較べて両肩が急激に落ちこんで、それから緩やかに底部に至るという具合である。図上の破線部分は、発掘に際してトレンチ壁が非常に脆い状態を示したために、実測作業を中断せざるを得なかったための推定線である。遺構はローム面をきっちりと掘りこんで築かれており、非常に計画的なモニュメントである。覆土も8W－1号溝と類似しており、下層ではかなりの水流があったことを予想させる砂層が、20cmもレンズ状に堆積している。また、溝底部より1.2m程上部には、浅間B軽石層の純層が平らに堆積し、該期にはすでに6W－1号溝は埋没していた証左であろう。

出土遺物は土器片がほとんどで、それも多くが溝底部の砂質層からの出土であり、土師器や須恵器が多い。8W－1号溝におけるA期の土師群と同様である。

c　11W－1号溝

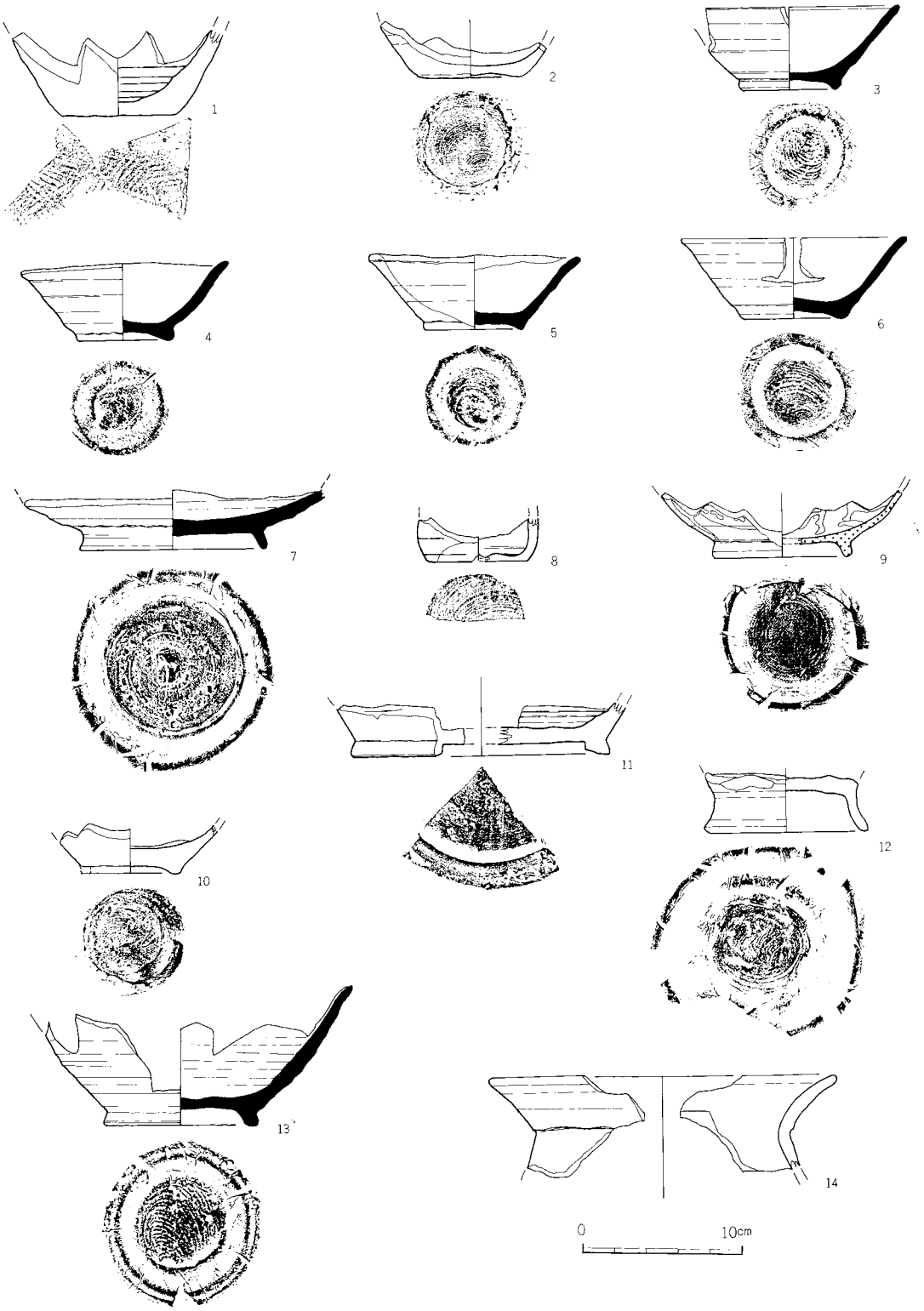
11トレンチZ－21・22グリッドに位置する。この溝の西5mには11W－2号溝が存在する。本溝も6W－1号溝、8W－1号溝に比べると、幅、深さともに小形化してはいるものの、ローム層をしっかりと掘りこんだ立派な溝である。AとBの大小の溝でひとつの施設を構成していると考えられるが、小形ではあるが基本的には8W－1号溝と同様の形態である。

覆土は、11W－1A号溝ではF層に水の流れた痕跡を示す砂層20cmと長期間水が停滞した状態にあったことを示す第4層、第5層が存在する。これは、本溝が8W－1号溝、6W－1号溝と一連のものであることを物語っている。しかし、浅間B軽石層の堆積は見られない。

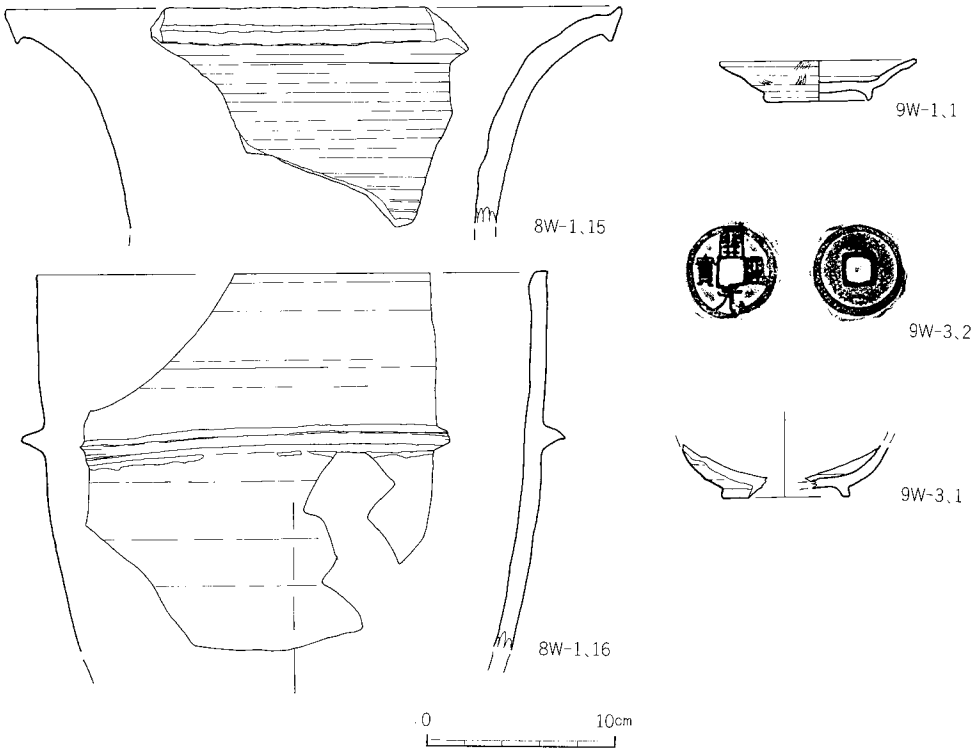
遺物は、8W－1号溝A期土器群と類似した内容をもっている。土師器（甕・杯）や須恵器（甕・杯）の破片が、底部の砂質土層に包含されている。

d　9W－1号溝（第46図）

9トレンチ東端に位置し、元総社小学校通学路と重って存在する。推定規模は、幅8m、深さ2.8mを測り、主軸方位はN－10°－Eを向いている。本溝西肩部は、70°の角度で落ちこみ、一旦平坦面を形成し、再び50°ほどの角度で溝底部にまで落ちこんでいる。



第48図　8W-1号溝出土遺物(1/4)



第49図　8W-1・9W-3号溝出土遺物(1/4)

覆土は7層を数えるが、第5層においてわずかに水流したと考えられる形跡（ラミナの発達）がみられるが、、その他は常に水の影響はうけつつも水流したのではなく湿地化した状態がかなり長い期間継続したであろうことが予想される。

出土遺物は前述の平担面から灰釉段皿が一点あるがこれは清里・陣場編年によれば11世紀におかれるもので本溝に先行する時代の所産である。図示しえなかったが他に中世及び近世の遺物が出土している。

e　9W－2号溝

9トレンチ東端A－2グリッドに位置し、9W－1号溝に平行してN10°Eの方向性をもっている。9H－3号住、9H－4号住、9H－1号住を切って調査区外へ南北にのびている。

規模は幅1.5m、確認面からの深さ0.4mを測る。

溝の覆土は3層に分かれ、浅間B軽石が多量に含まれる土層が主体である。構築の仕方は断面が円孤の一部分を切り取ったような形状に仕上げてあり、水の流れた形跡はない。

f　9W－3号溝（第46図、図版1）

9トレンチ西延長部を東西にN99°Eの方向性をもって走っている。規模は上幅1.5m、下幅0.72m、深さは最大0.42mであるが、推定復元の深さは1m程度になると考えられる。

溝の覆土は4層に分けられ、浅間B軽石層の混入の仕方や土層の堆積状況が9W－2号溝と類

似しており、同時期の所産と考えられる。覆土からは水流の形跡は全くみられず、空堀である。形状は、Y—11～13グリッドの溝底部は、幅20～30cmの小溝が掘られており、西へ延びるにしたがって幅は50～60cmに拡がり、断面形も薬研堀に近い形状となる。

出土遺物は、図示した緑釉高台杯がX—5グリッドから、開元通宝がY—16グリッドの溝底部から出土している。他に土師杯や須恵甕及び布目瓦が数多く検出されたが、それらは9W—3号溝に直接つくものではなく、流れこみによるものと理解される。

g　11W—3号溝（第47図、図版1）

11トレンチ西端のZ—3、4グリッドに位置し、N88°Eの方向性をもってほぼ東西に走り、11H—4号住の1部を切って調査予定地外へ延びている。規模として確認できたのは、ローム面に掘りこまれた底部に近い部分であるが、幅70cm、深さ20cm程度が測れるのみである。溝の断面形は、ほぼ9W—3号溝と同様に底部に幅15～20cm、深さ10cmの小溝が掘られている。その覆土は図示しえなかったが、基本的に9W—2号溝、9W—3号溝と同質で、同様の埋没過経を経たものと推察される。

15.　その他の遺構　（FM—1号墳、8I—1・11I—1・FI—1号井戸、8W—1号溝内集石遺構）

a　FM—1号墳（第50図、図版5）

FトレンチD—1、2グリッドに位置する本遺構は、その底部から形象埴輪の一部が検出された。そのため、古墳の周溝ではないかと考えたが確認されるまでには至っていない。

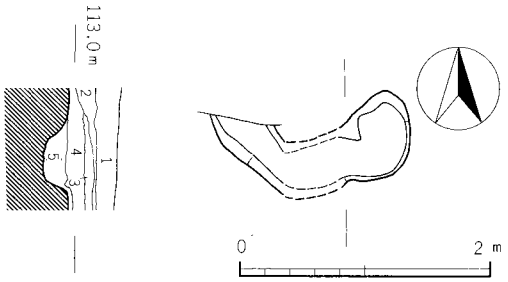
規模は幅70～80cm、深さ80cmを測り、形状は両肩部が急激に落ちこみ、底部では平坦面を形成している。平面形は、円の一部のように丸味をおびてトレンチ外へ展開しているが、かなりの攪乱を受けているため定かでない。

形象埴輪は、塚廻り古墳における人11「大刀を持つ女子」の裾と基部先端が残存していると考えればまちがいないと思われる。

b　8I—1号井戸（第51図、図版5）

8W—1号溝内に包含される形で検出された。円形プランに近く、東西径2.2m、南北1.8mであり、深さは1.85mを測る。上半部は擂鉢状に緩やかに傾斜し、深さ1mのあたりで急傾斜となり、底部に至って平坦となる。

覆土を検討すると、この井戸は一旦埋没した後に再度掘削された形跡が窺える。最初に掘られた井戸は、平面図の検討からも8W—1号溝の構築プランにおさまるように企画さ



1層　耕作土、A軽石を多量に含む。
2層　褐色土、旧耕作土、多量のA軽石を含む。
3層　茶褐色土、FP、CP、ロームブロック粒、焼土粒を含む。
4層　黒褐色土　CP、ロームブロック粒を含む。
5層　黄褐色土　黄褐色ロームブロックと黒褐色ブロックをまだら状に含む。粘性、締りあり。

第50図　FM-1号墳(1/120)

れているふしがある。また、擂鉢状の傾斜部分に3個の小さな掘りこみが検出されているが、なんらかの井戸施設の痕跡なのかも知れないが、類例を他にみない。

c　11Ｉ－１号井戸（第51図、図版５）

11トレンチＺ－5グリッドに位置し、11Ｈ－３号住と11Ｈ－４号住の間に存在する。全体として円形プランをもち、東西径２m、南北は推定で２m、深さ１mである。上部から30cmあたりまで擂鉢状に傾斜し、それから急傾斜に落ちこみ底部で平坦となる。形状は８Ｉ－１号井戸と類似したロート状井戸である。

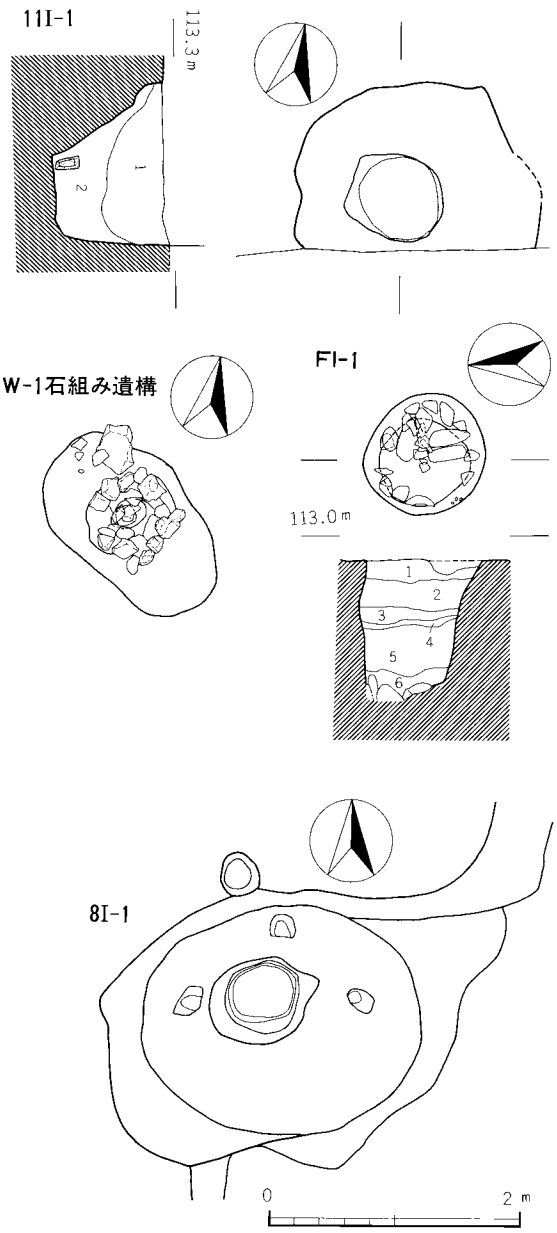
d　FI－１号井戸（第51図、図版５）

Ｆトレンチの南端Ｋ－２グリッドに位置し、径１mの円形プランを呈する。深さは投石上面までは１mだが、投石を排除すると２m近くにまでおよんだ。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちこむ円筒状を呈する。覆土は第５、６層に黒色灰層を有する。同様の傾向は、先年度調査の７Ｉ－１号井戸、AI－１号井戸でもみられた。本井戸は、埋没の状態や投石からも、何等かの原因で人為的に廃絶したものである。

出土遺物には、中世カワラケがある。

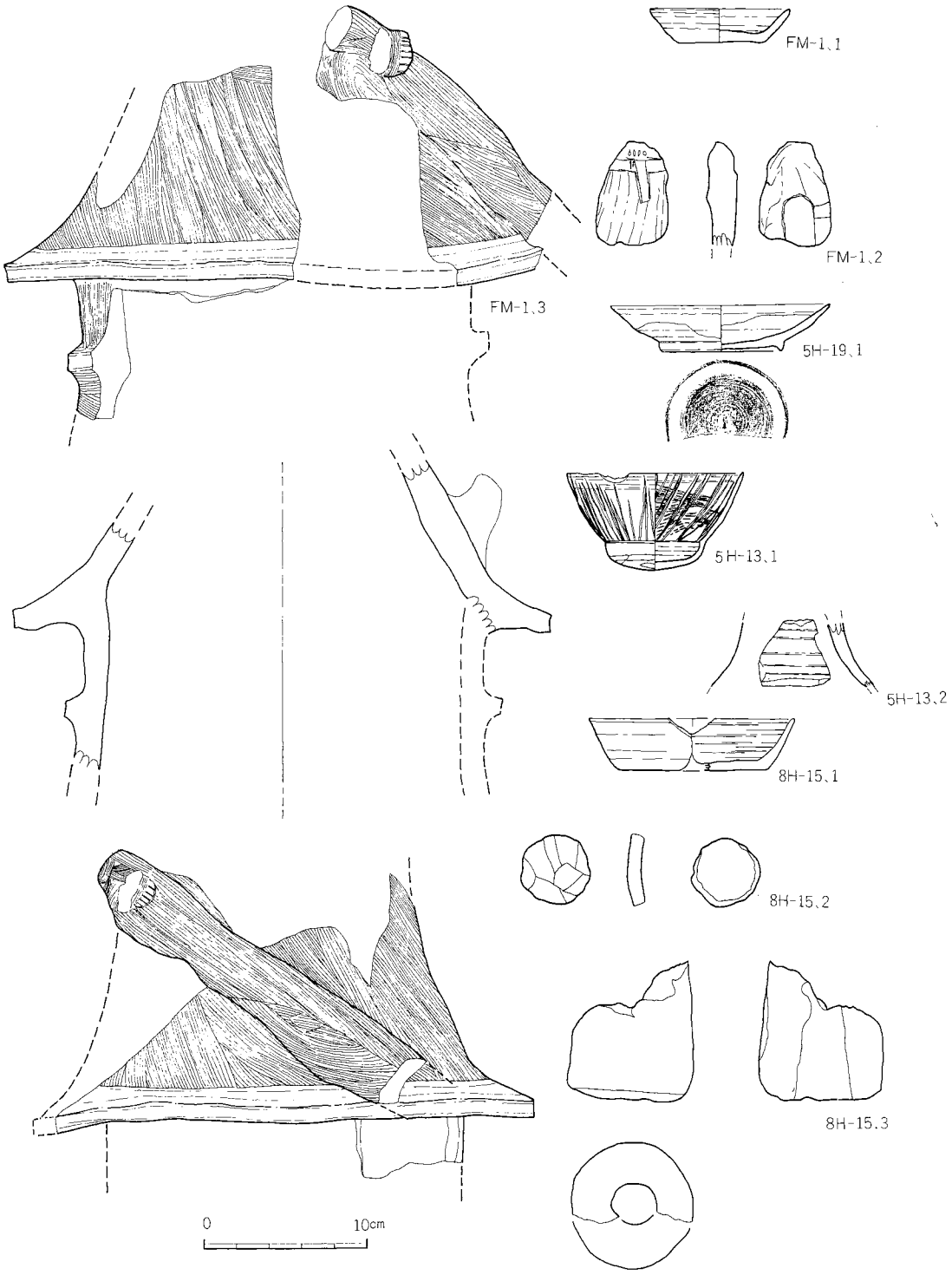
e　８Ｗ－１号溝内集石遺構（第51図、図版２）

８Ｗ－１号溝の西肩部が落ちきったところに位置する。東西径50cm、南北



11－１
１層　暗褐色土、砂質、ＦＰ５％、ロームブロック少量。粘性有
２層　暗褐色土、砂質、ＦＰ３％、ロームブロック少量、粘性有。
ＦＩ－１
１層　褐色土　砂質で固くしまっている。
２層　褐色土　砂質でしまりが少なく、黒味が少ない。
３層　褐色土　砂質で柔らかく、湿り気がある。
４層　黒褐色土、粘性がある。
５層　灰褐色土、湿気があり、焼け土を含む。
６層　灰褐色土、湿り気があり、砂質性分が多い。

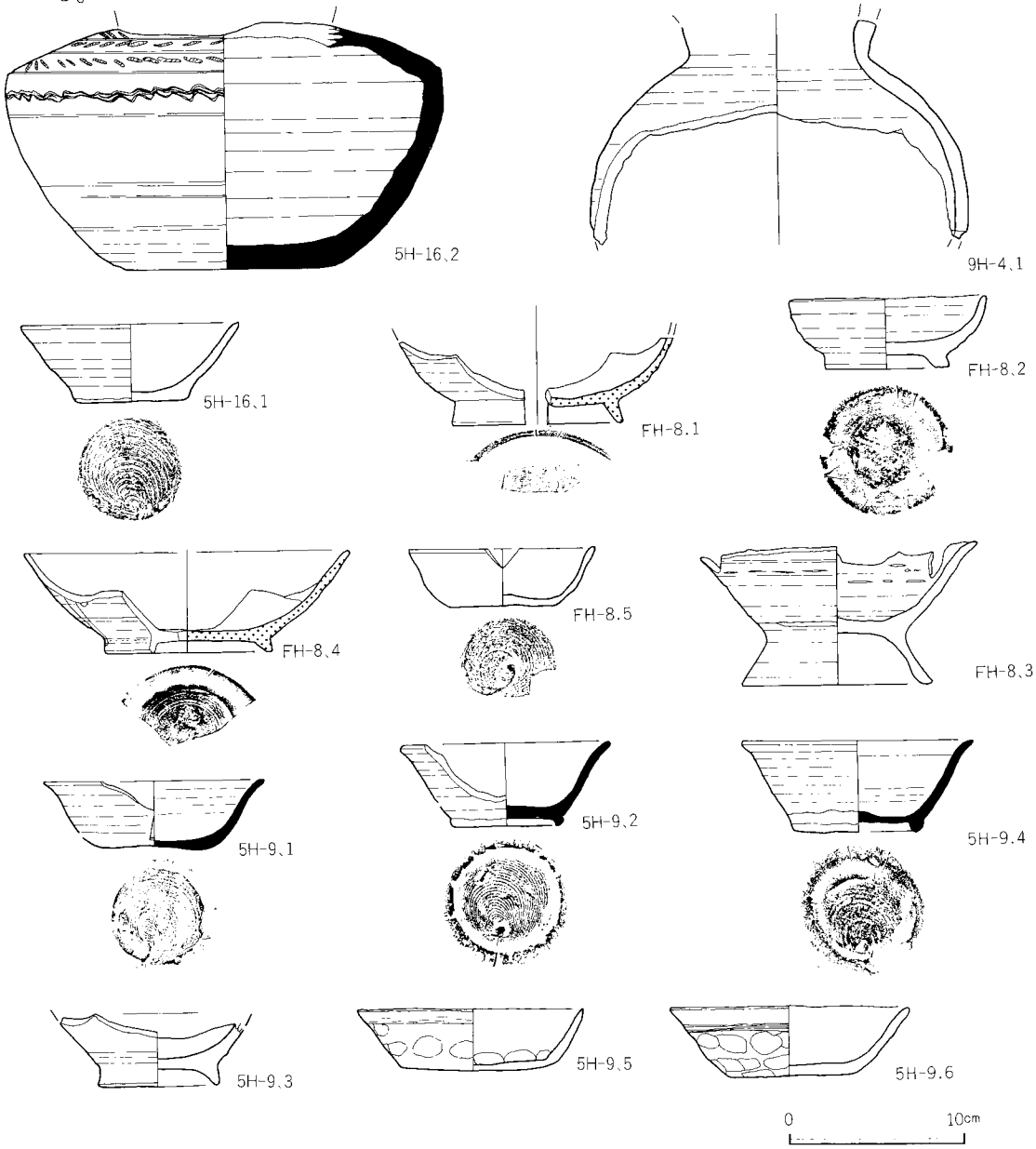
第51図　FI-1・11I-1・8I号井戸、8W-1号溝石組み遺構(1/60)



第52図　FM-1号墳、5H-19・5H-13・8H-15号住居址出土遺物(1/4)

径50cmのほぼ円形を呈するピット状遺構の上部に、川原石が30数個集石している遺構である。断面の形状は、肩部が緩やかに擂鉢状に30cm落ちこんだ地点で急激に底部にまで至り、深さは60cmを測るロート状の断面を呈する。覆土は大溝底部の土層と類似しており、大溝埋没時に埋ったものと考えられる。

出土遺物は、羽から口縁にかけて異様に長い土器がある。(第48・49図、図版10)。これは、羽釜状の底部全体がぬけている甑形土器と推察される。その他に13の須恵高台椀がともに出土している。



第53図　5H-16・9H-4・FH-8・5H-9号住居址出土遺物(1/4)

第4表 遺 構 一 覧 表

住居番号	主軸方向	形状	規模（長軸×短軸）（m）	床面積（m²）	カマド 位置	カマド 主軸方向	カマド 幅(cm)	周溝	柱穴	貯蔵穴	備考	重複関係
5H－1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明、貼床で住居確認	5H－3 5H－1
2	N－105°－E	長方形	3.00×2.06	6.18	東壁	N－105°－E	50	×	×	×	南壁未発掘、東北壁一部推定。	5H－3 5H－2
3	N－103°－E	正方形	2.66×2.53	6.73	東壁	N－98°－E	－	×	×	×	西壁および東壁の一部を除いて推定。	
4	N－97°－E	長方形	2.49×2.00	4.98	東壁	N－98°－E	50	×	×	×		5H－6 5H－4 5H－5
5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明、5H－6の貼床に位置	
6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明、竈位置に炭火物と灰が堆積	
8	N－99°－E	長方形	3.40×2.64	8.78	東壁南寄り	N－104°－E	50	×	×	×	本文参照	5H－9 5H－8
9	N－100°－E	正方形	2.86×2.85	8.15	東壁	N－100°－E	64	×	×	×	南壁未発掘、西壁立ち上がり不明、床面積推定、壁高8cm	
10	N－99°－E	長方形	3.27×2.61	8.54	東壁南寄り	N－105°－E	62	×	○（1）	×	南西壁立ち上がり一部を残して推定。壁高10cm	5H－13 5H－12 5H－11 5H－10
11	N－103°－E	長方形	2.61×1.87	4.88		N－100°－E	60	×	×	×	南壁未発掘、北西壁推定	
12	N－103°－E	正方形	3.25×3.11	10.12	東壁中央	N－103°－E	66	×	×	×	本文参照	
13	N－95°－E	正方形	3.98×3.68	14.65	－	－	－	×	×	×	南壁未発掘、北西壁推定	
14	N－118°－E	長方形	3.44×2.05	7.10	東壁中央	N－93°－E	86	×	×	×	本文参照	
15	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
16	N－83°－E	長方形	3.55×2.72	9.66		N－89°－E	60	×	×	○	南壁、西壁の一部、北東壁一部未発掘	
17	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
18	N－104°－E	長方形	3.30×2.80	9.24	東壁中央	N－119°－E	56	×	×	×		
20	N－90°－E	長方形	2.91×1.68	4.89	－	－	－	×	×	×	南壁および東西壁の一部を残して未発掘。	
21	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
22	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
23	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
9H－1	N－104°－E	長方形	3.60×2.53	9.11	東壁南寄り	N－107°－E	66	×	×	×	本文参照	

9H－2	N－52°－E	長方形	3.60×1.84	6.62	－	－	－	○	○(2)	×	南、西壁の一部のみ残存。	
3	N－72°－E	正方形	6.59×6.09	40.13	東壁南寄り	－	－	○	○(4)	○	本文参照	9H－1 9H－4 9H－3
4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
5	N－68°－E	長方形	3.99×2.61	10.41	－	－	－	○	×	×	南西壁一部を除き未発掘	
8	N－95°－E	長方形	3.09×2.39	7.39	東壁中央	N－99°－E	50	×	×	×	本文参照	
10H－1	N－78°－W	長方形	3.00×2.50	7.5	東壁中央	N－79°－E	56	－	－	－	南壁未発掘、北壁一部残して不明	10H－1 10H－3 10H－2
2	N－89°－E	長方形	2.80×2.05	5.74	東壁南寄り	N－92°－E	42	×	×	×	西壁と南北一部残して不明	
3	N－71°－E	正方形	2.87×2.54	7.29	東壁南寄り			×	×	×	本文参照	
4	N－54°－E	長方形	4.14×3.32	13.75	東壁南寄り	N－68°－E	80	○(一部)	○(2)	○	本文参照	
5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
11H－1	N－101°－E	長方形	3.56×1.72	6.12				×	×	×	東西壁の一部残して未発掘	
2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
3	N－73°－E	正方形	4.49×4.13	18.54	東壁南寄り	N－81°－E	95	×	×	○	本文参照	
4	N－71°－E	長方形	4.09×3.39	13.87	－	－	－	×	×	○	本文参照	
FH－1	N－84°－E	長方形	2.80×1.02	2.86	東壁南寄り	N－92°－E	60	×	×	×	西壁・南北壁⅔未発掘	
2	N－81°－E	長方形	4.58×2.98	13.65	東壁中央	N－83°－E	90	×	×	×	西壁・北壁⅔未発掘　壁高3cm	
4	N－177°－E	長方形	3.33×1.71	3.90	－	－	－	×	×	×	東壁未発掘	
5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
6	N－77°－E	長方形	6.35×5.10	32.39	－	－	－	×	○(5)	×	本文参照	
7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	形状不明	
8	N－78°－E	正方形	2.72×2.61	7.10	東壁南寄り	N－88°－E	59	×	×	×	西南壁・北壁⅔未発掘。壁高30～35cm	
6W－1	N－20°－E	－	－	－	－	－	－	－	－	－	幅3.88m、深さ0.62m　本文参照	
8W－1	N－2°－E	－	－	－	－	－	－	－	－	－	幅7.2m　本文参照	
9W－1	N－2°－E	－	－	－	－	－	－	－	－	－	本文参照	
9W－2	N－10°－E	－	－	－	－	－	－	－	－	－	本文参照	
9W－3	N－99°－E	－	－	－	－	－	－	－	－	－	本文参照	

第5表　出土遺物一覧表

住居番号	土師器							須恵器									灰釉陶器				鉄		砥石	その他	備考
	坏	甕	甑	高杯	坩	脚付甕	その他	羽釜	壺・甕	杯	埦	高台椀	蓋	皿	高台皿	その他	埦	皿	段皿	瓶・壺	製品	鉄滓			
5H—1	7	5			1				4	(2)		4 (3)	1												
5H—2	4	4				1	高台埦 3	1	2	3 (4)	(5)	11													
5H—3	13	7								3 (1)	10	4 (3)	1												
5H—4		3							大甕 1			1 (5)													
5H—5	3					1	高台埦 1			1	1	1 (1)													
5H—6	2	1				1						(6)													
5H—7	3											4 (2)													
5H—8	4	6								1 (1)		(1)													
5H—9	12	4				2	羽釜 5			(1)		2 (4)	1											縄文破片 5	
床面下 5H—9	1	6						1		1		(6)						破片 2						2	
5H—10	1	5		1					1			2 (2)								長頸瓶 1					
5H—11		2										2 (4)													
5H—11下												1 (2)													
5H—12	5	6				1	羽釜 2		大甕 1			(4)	3			長頸瓶 1	1	1						縄文土器 2	
5H—13	7	4			1	2			3	2	2		4			高坏 1	2			1				縄文土器 1	1（平瓦）
5H—14	5	1					羽釜 4			4 (4)		4 (17)	4							破片 3				縄文土器 1	
5H—15	破片 3	破片 1					高台椀 2		大甕 3	2		1 (2)						1						平瓦 1	
5H—16								4	3	1 (2)		3 (4)								長頸瓶 1				石斧 1	
5H—17	6	4	1						大甕 5	3					高台付盤 1										
5H—18	5	9				3	羽釜 3			4 (1)		4	2											縄文破片 4	
5H—18下	5	3							大甕 1	1 (2)		4 (2)	1				1			小瓶 1				縄文土器 1	1（平瓦）
5H—19	8	5						1	8	7 (7)		17 (3)	4	1			1	9		破片 4				縄文土器 3	灰釉出土多
5H—20		4						3	大甕 2	4 (2)		6 (4)	破片 2				高台椀 2								

5H—21	3			2	7				1	2		(2)						1							
5H—22	1			1	2				5	3															
5H—23									破片 7	3 (5)	9	5				長頸瓶 2				1				平瓦 1	
8H—19	23	15		2					23	7			13												
8H—20	18	9		2					破片 4																
9H—1	5	6				1			1	2										短頸瓶 1				縄文土器 1	
9H—3	10	12	3	6	1	1	1		1	2 (1)		1	1												
9H—4	9	2		2					破片 3	1														円筒埴輪部分 1	
9H—5	8	1		1																					
9H—8	4	3				1			3	20 (15)		2												平瓦 1	
10H—1	4	6											1												
10H—2	3	3						2	2	(1)		2													
10H—3	5	2		1	1	19	壺 1 羽釜 1	2	3	3		8 (4)	1				4	1						平瓦 2	
10H—4 (1)	12	7		1	1							1													
10H—4 (2)	11	2																							
10H—5	1	1			2	13																			
11H—1		2					カワラケ 2	1		(3)		(2)					2								
11H—3	6	5	1	1	1				1		1														
11H—4	4	5	1				壺 1		1																
FH—1	2	3				1		2				3 (2)					1	2							
FH—2	10	4	1				壺 2 羽釜 4	2	3	2 (6)		(2)	1				1	1							
FH—6		2				70	壺 3																		
FH—7										4		1													
FH—8	1					1	羽釜 6	4	4	2 (1)		(3)				長頸瓶 1	3								
FM—1	2	12						1	9	1		1 (1)					1							形象埴輪 1	
FI—1							カワラケ 1		2				1				1								

（　）は土師質土器

Ⅳ　ま　と　め

1.　住居址について

a　古墳時代住居址

遺跡地の西縁８、９、11トレンチで確認されている。石田川期住居は４軒検出されているが、トレンチ調査のため全容を把握できたので皆無である。その中でも比較的良好だったのは、FH－６号住居址で、掘り方の整美な構築プランには驚かされる。石田川期住居は集落としてのまとまりは感じられず、２～３軒が１単位となってまとまりを構成している。立地は、奈良・平安住居址と重なり合うような場所を選地している。

鬼高住居址は５軒を数え、比較的安定した地盤の上に集落を形成している。とくに今回調査した11H－３、４号住は無柱穴住居で、規模は小さく形状は酷似している。先年度調査したGH－７号住も無柱穴住居であり、位置も近いことから同一の集団であろう。類例としては、端気遺跡で検出されたH－２、12号住[註1]がある。また、９H－５号住から８個の編物石が出土している。重量を計測したところ、近似した重量をもつ３組の組み合わせが可能となった。

b　奈良時代住居址

５、10トレンチで確認されて、石田川期住居と同じような場所に立地している。10H－４号住はトレンチで南側を切られながら、検出された部分は良好な遺存状況を示していた。竈右袖には長胴甕を芯材として利用した形跡が窺える。端気遺跡では袖に竈を利用した例は３軒にみられ[註2]、この系譜は鬼高Ⅰ期にまで溯れよう。

c　平安時代住居址

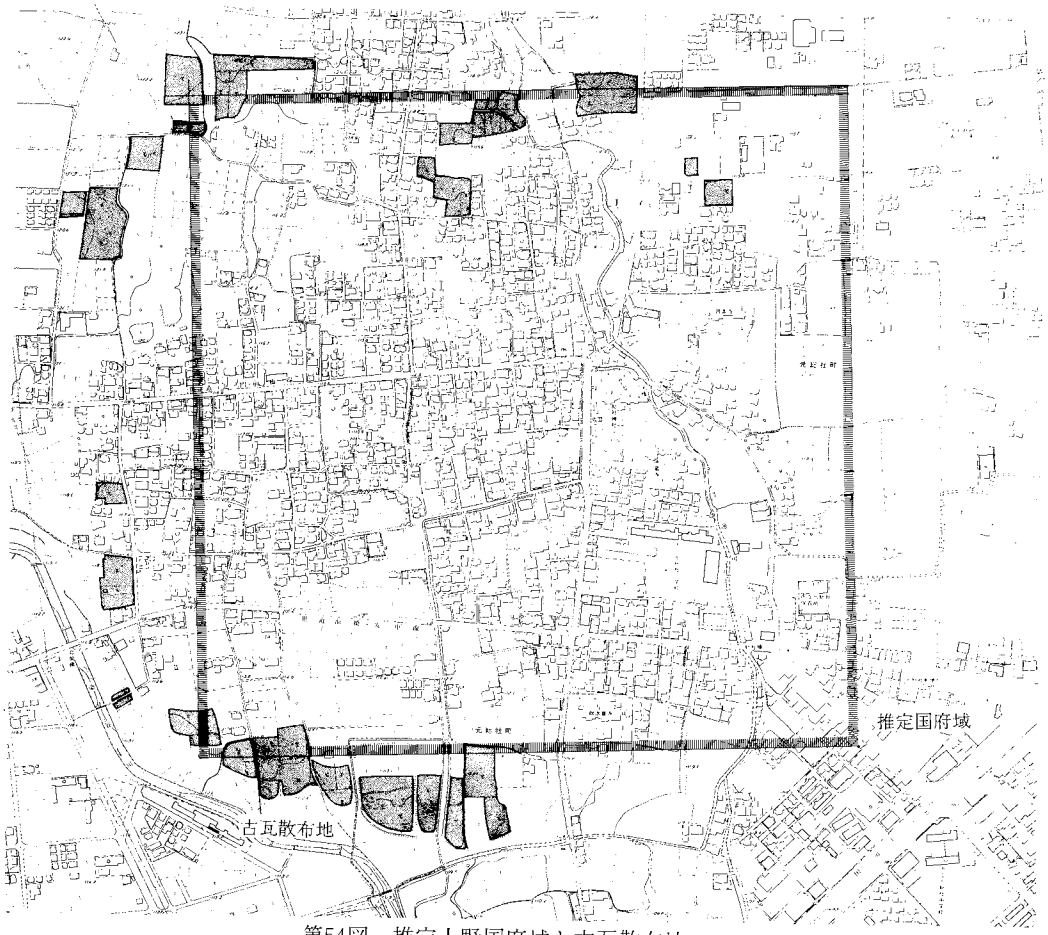
遺跡地のほぼ全面に亘って検出されている。とくに、５トレンチ東半部における密集度の高さは、異常とも思えるほどである。ほとんどの住居が一様に東を向き、重複のしかたにも規則性が感じられる。重複のしかたには２タイプあり、５トレンチに多くみられ、廃棄した竈を壊さずに若干後ろに下げる形で重複させるタイプと竈を全く反対の方向に築き、住居の尻を重複させるタイプである。

奈良時代まで比較的重複の少なかったものが、何故に平安中期以降になると重複のしかたが意図的な色彩を帯びてくるのであろうか。これに対する回答として、宅地意識の反映[註3]であるという考え方もあるが、検証はこれからの課題である。

2.　溝について

a　大　溝（８W－１、６W－１、11W－１、13W－１）

本遺地のほぼ中央を南北に流下する大溝が検出された。この大溝は６トレンチ、８トレンチ、11トレンチ、13トレンチで検出され、用水のつけ替え工事の際、１トレンチを西へ延長した斉木



第54図　推定上野国府域と古瓦散布地

薬師の祠付近でも確認されている。確認された部分をつないでみるとその長さは、約430mにまで及び、しかも調査予定地外へ延びていく様相を呈している。はたして、この巨大なモニュメントは何であろうか。

近藤義雄氏は、これまでの発掘調査の結果[註4]から、昌楽寺東の南北に走る溝から西の地を国府推定地としている[註5]。そこでは、南北の溝を東の外郭線と考え、その北東の基点を昭和41年の発掘地[註6]におき、それより8町南の水路が流れる付近までを東の線とし方8町を求めている。

大溝を地図上におとしてみると、近藤説国府域東外郭線から東へほぼ1町のところに存在していることに気づく。出土遺物からみると、大溝が盛んに水流していたのは、A期土器群の時期(清里、陣馬編年では第2期類―9世紀後葉）までと考えられる。そして、出土遺物と覆土の状態から大溝の埋没開始時期を10世紀前葉に位置づけられよう。

前橋市教育委員会は、昭和58年2月元総社町字閑泉樋において、閑泉樋遺跡緊急発掘調査を行った[註7]。その際、N89°Eの方向に走る大溝を検出した。この大溝は上幅7m、下幅4m、深さ2mを測り、出土遺物と覆土の状態から推測すると、この大溝の埋没開始時期も10世紀前葉と考えられる。

ほぼ規模を同じくし、埋没開始年代を国府衰退期に近接する時期にもつこの２つの大溝を、推定国府域の北と東の外郭線としてみると第54図のようになる。古代上野国が大国であったことから、方８町の国府域をもつ[註8]と仮定しての線引きである。先年度の元総社明神遺跡Ⅰの推定国府域を１町東へ移動した図が、第54図である。

前橋市教育委員会の調査で検出された２つの大溝が、北と東の区画施設であるとして方８町の国府域を想定すると、牛池川を府域内にとりこむことになるが、諸国の国府の中にもそういう例がある[註9]のでさして問題にはならないだろう。

次に、日高条里との関係を少しく考えてみたい。高崎市教育委員会が作成した日高条里の想定線[註10]に従って、国府推定地に条里の網の目をかぶせてみると意外なことに気づく。それは、一応国府域外郭線とした北・東の大溝が条里の網の目の上にうまくのってくるという事実である。都城や国府が条里方眼を基礎に造営された例というのも多い。例をあげれば、藤原京は大和条里を、長岡京が山城乙訓郡の条里を基礎として造営されている。国府では、周防国府は条里の施行と国府の造営が同時期であると[註11]予想されている。方８町の府域を有すると考えられる上野国府についても条里遺構と国府プランについて、様々な資料の増加をまって検討していく必要があるだろう。

国府域の区画施設には、一般に府域の周辺に低い土塁又は、土居をめぐらした場合が多い[註12]といわれるが、東北の城柵的機能をもった国府では、溝渠が多いように思われる。下野国府についても、国府域の四方を溝がめぐっていると推定している[註13]。もし、２つの大溝が上野国府域を限る区画施設だとすれば、防御的性格をもつ東国的形態といえるかもしれない。

b　八日市場城推定地にかかわる溝（９W―１、９W―２、９W―３）

山崎一氏の「古城墨址の研究」によれば、昌楽寺を中心とした微高地は、八日市場城の故地と推定されている。そこにトレンチを入れたところ、３本の溝が検出された。９W―１号溝は、前述した近藤説国府域の東限を画する溝である。覆土の状態や出土遺物（中世から近世へかけてのもの）から、積極的に国府の東外郭線を証するものはなく、中世末の八日市場城にともなう溝というほうが妥当であろう。９W―２、３についても、覆土の状態や遺物から、そう古い時期のものとは考えられず、やはり八日市場城につくものであろう。ただ、埋土としてとりあげた出土遺物の中には、布目瓦や平安時代の遺物が多数混入しており、付近にはより古い時代の遺構の存在が予想される。

註

註1　木暮　誠、前原　豊「端気遺跡群II」前橋市教育委員会　1983

2　　同　上

3　高橋一夫「集落分析の一視点」埼玉考古第21号1983

4　「上野国府発掘調査概報」上野国府発掘調査委員会、前橋市教育委員会　1966～1968

5　近藤義雄「上野国府をめぐる古代交通路」信濃　第33巻第2号　1981

6　「上野国府発掘調査概報」上野国府発掘調査委員会　1966

7　前原　豊、鵜木晋一、町田信之「閑泉樋遺跡」前橋市文化財報告書第13集、前橋市教育委員会　1982

8　米倉二郎「国の昇格と国府の変容」史林、第66巻第1号

9　藤岡謙二郎「国府」吉川弘文館1869

10　　同　上

11　斉藤忠他「周防の国衛」防府市教育委員会　1967

12　　同　上

13　大金宣亮他「下野国府跡」栃木県教育委員会　1983

図版 1

6 W－1 号溝

11W－3 号溝

5 トレンチ全景

F トレンチ全景

10トレンチ全景

13トレンチ全景

11トレンチ全景

9 W－3 号溝

9 トレンチ全景

8 W－1 号溝

5 H－18号住居址

11W－1 号溝

5 H－18号住居址カマド遺物出土状態

6 W－1 号溝

5 H－18号住居址カマド

5 H－14号住居址遺物出土状態

元総社明神遺跡近景

図版 3

5 H－14号住居址遺物出土状態

5 H－ 8 号住居址

5 H－14号住居址カマド遺物出土状態

5 H－ 8 号住居址遺物出土状態

5 H－14号住居址カマド

F H－ 6 号住居址

11 H－ 4 号住居址遺物出土状態

8 I－1号井戸

5 H－12号住居址カマド遺物出土状態

11H－3号住居址

10H－4号住居址

11H－3号住居址カマド

10H－4号住居址遺物出土状態

9 H－5号住居址

10H－4号住居址カマド

図版 5

9トレンチ全景

9Ｈ－１号住居址

10Ｈ－３号住居址

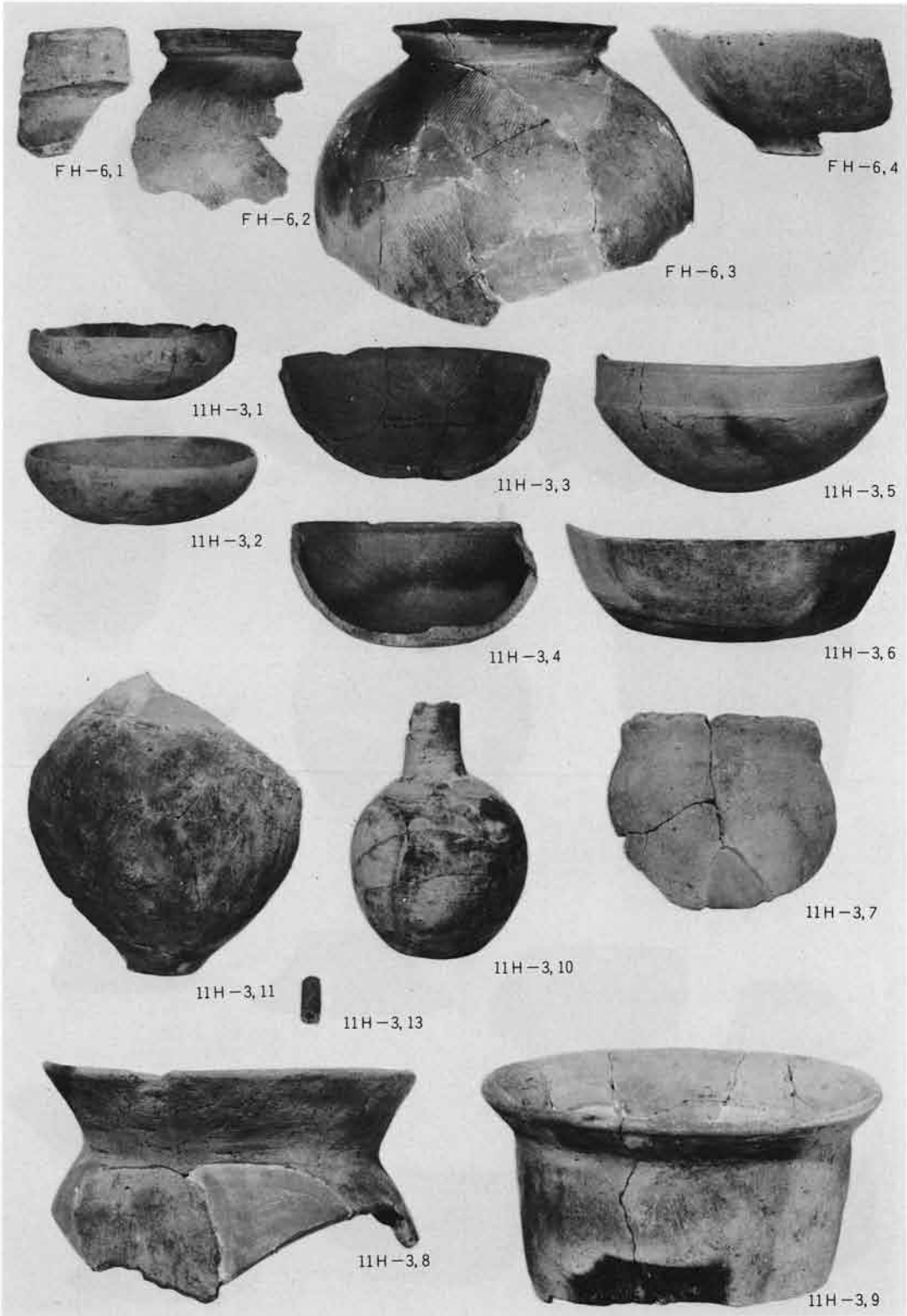
11Ｉ－１号井戸

10Ｈ－３号住居址遺物出土状態

8Ｉ－１号井戸

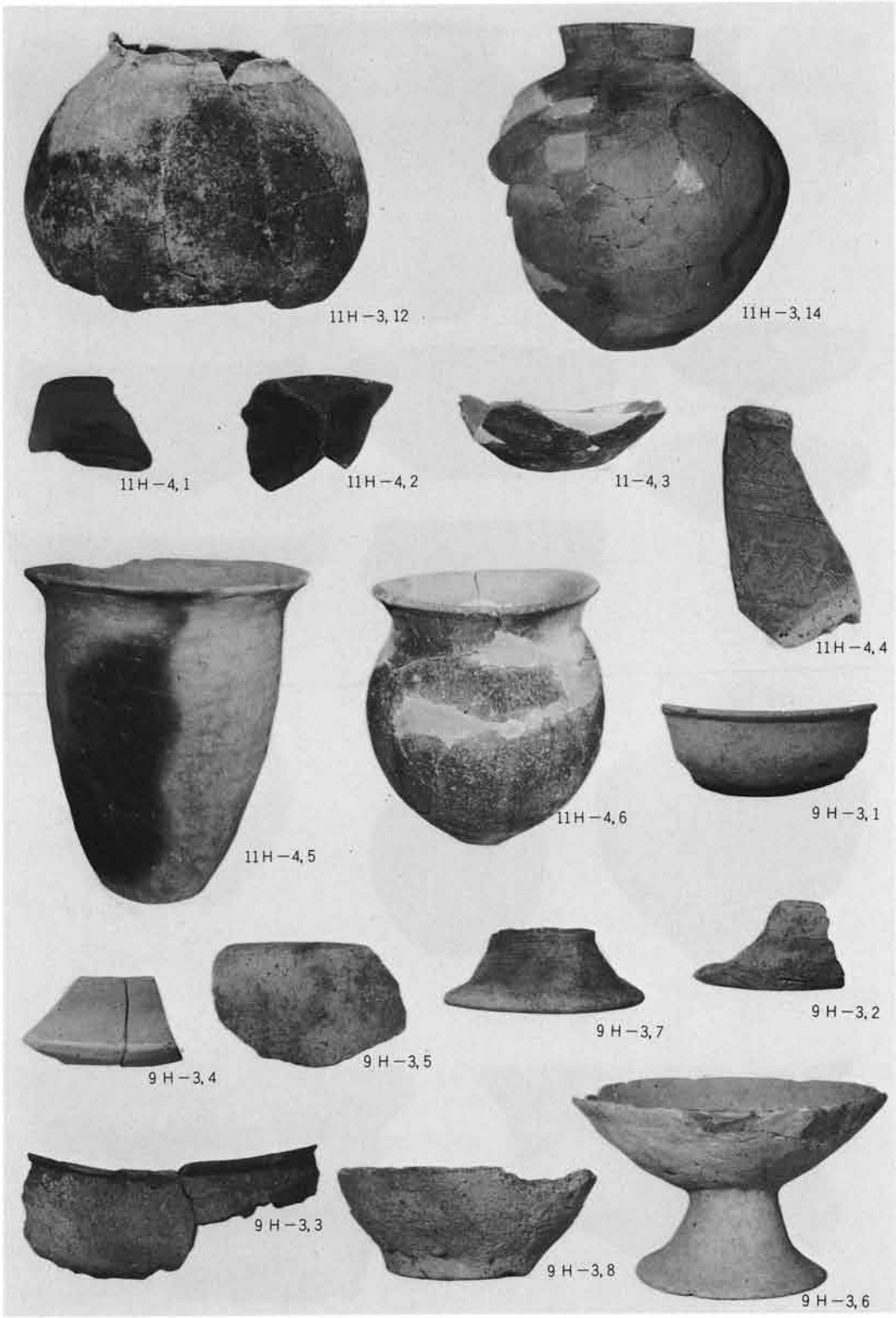
ＦＭ－１号墳

ＦＩ－１号井戸

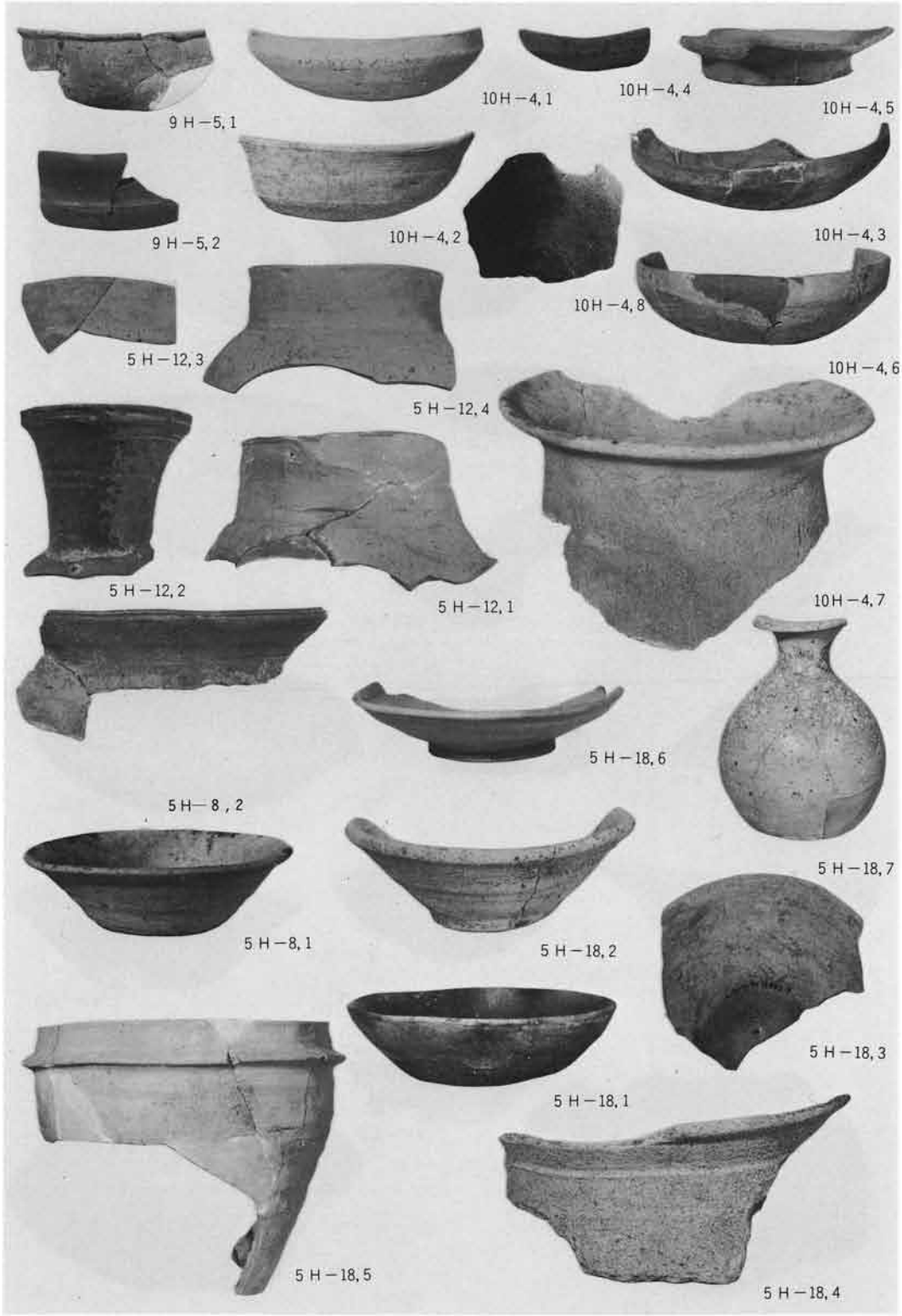


FH－6，11H－3号住出土遺物

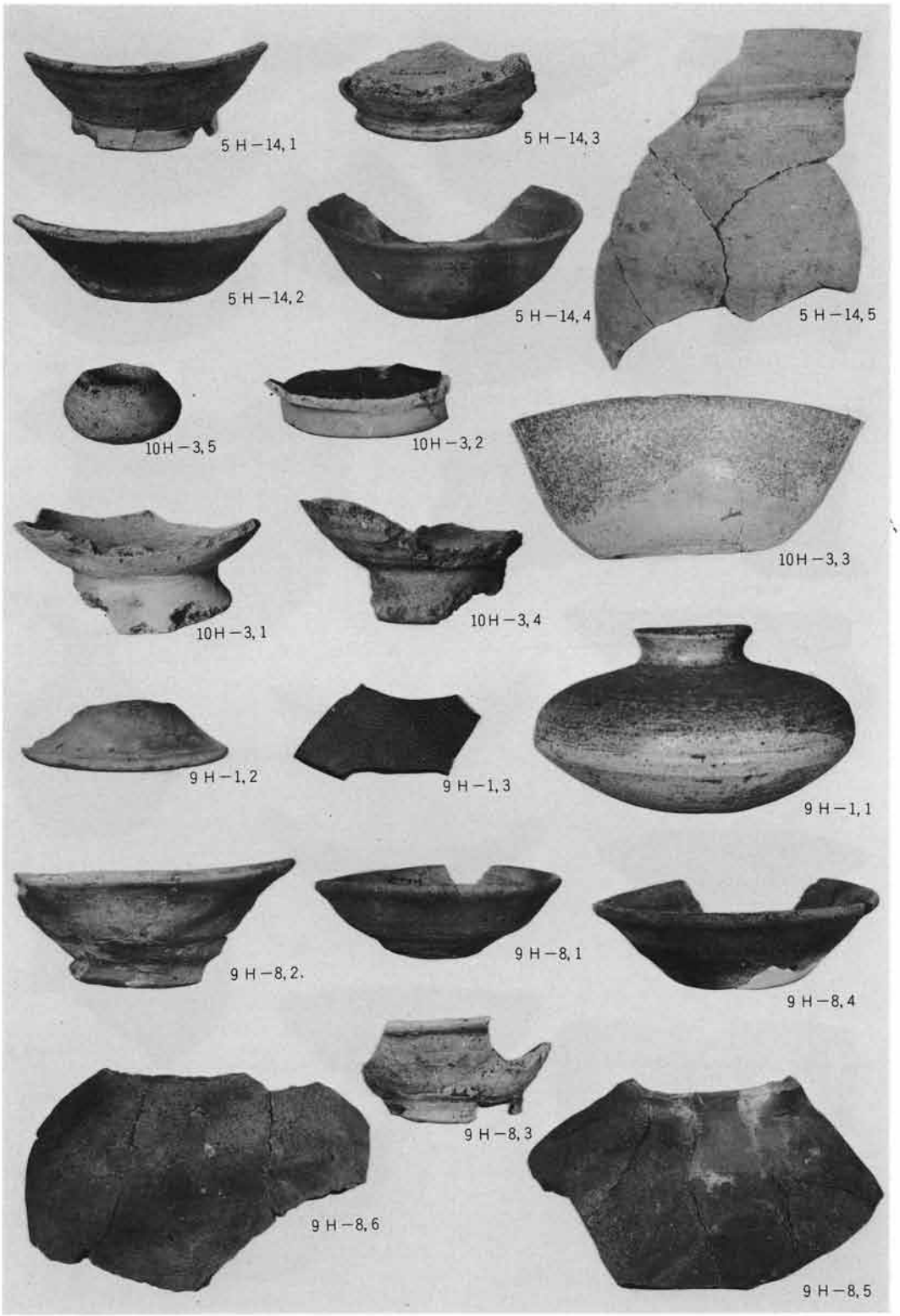
図版 7



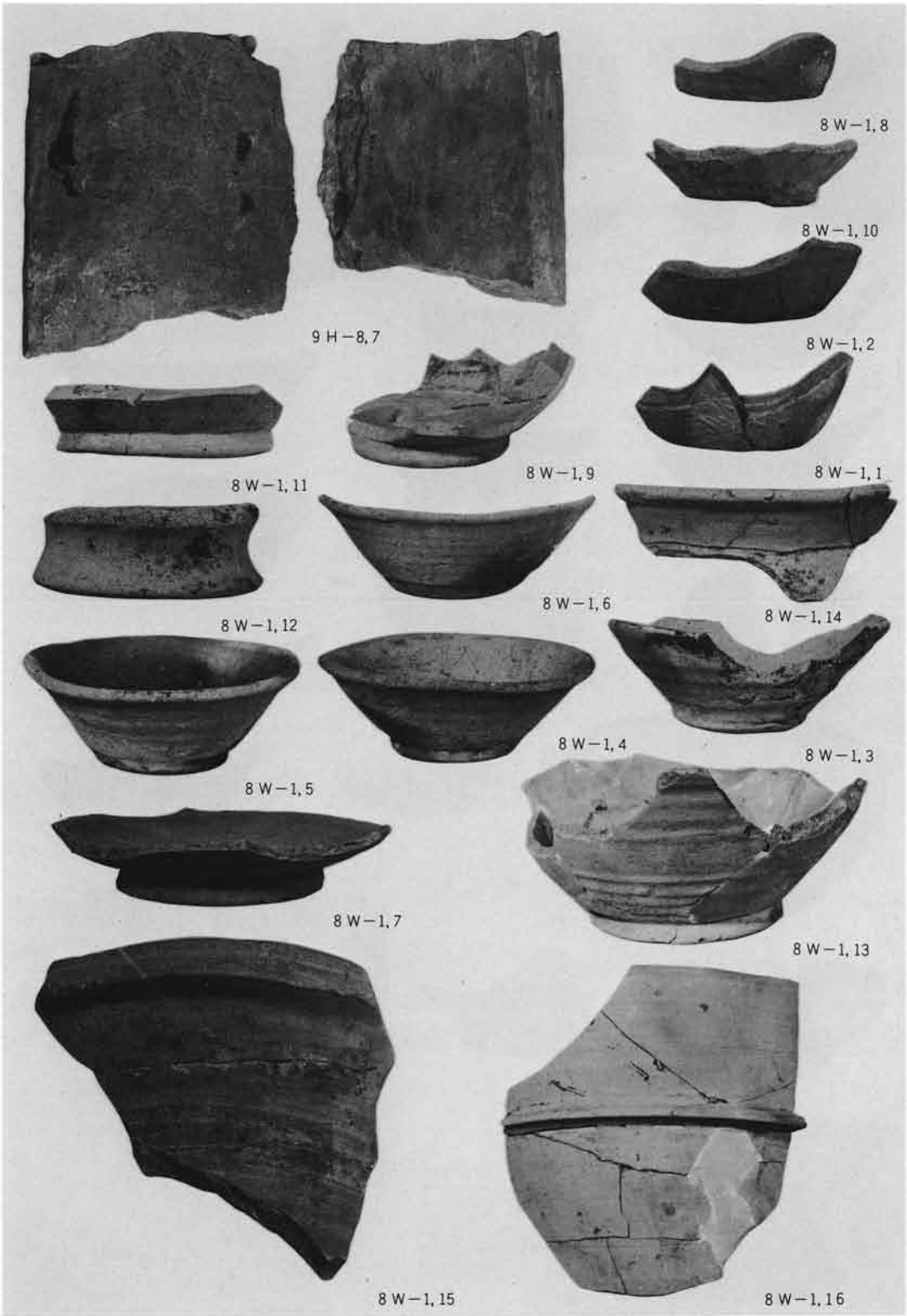
11H－3･4, 9H－3号住出土遺物



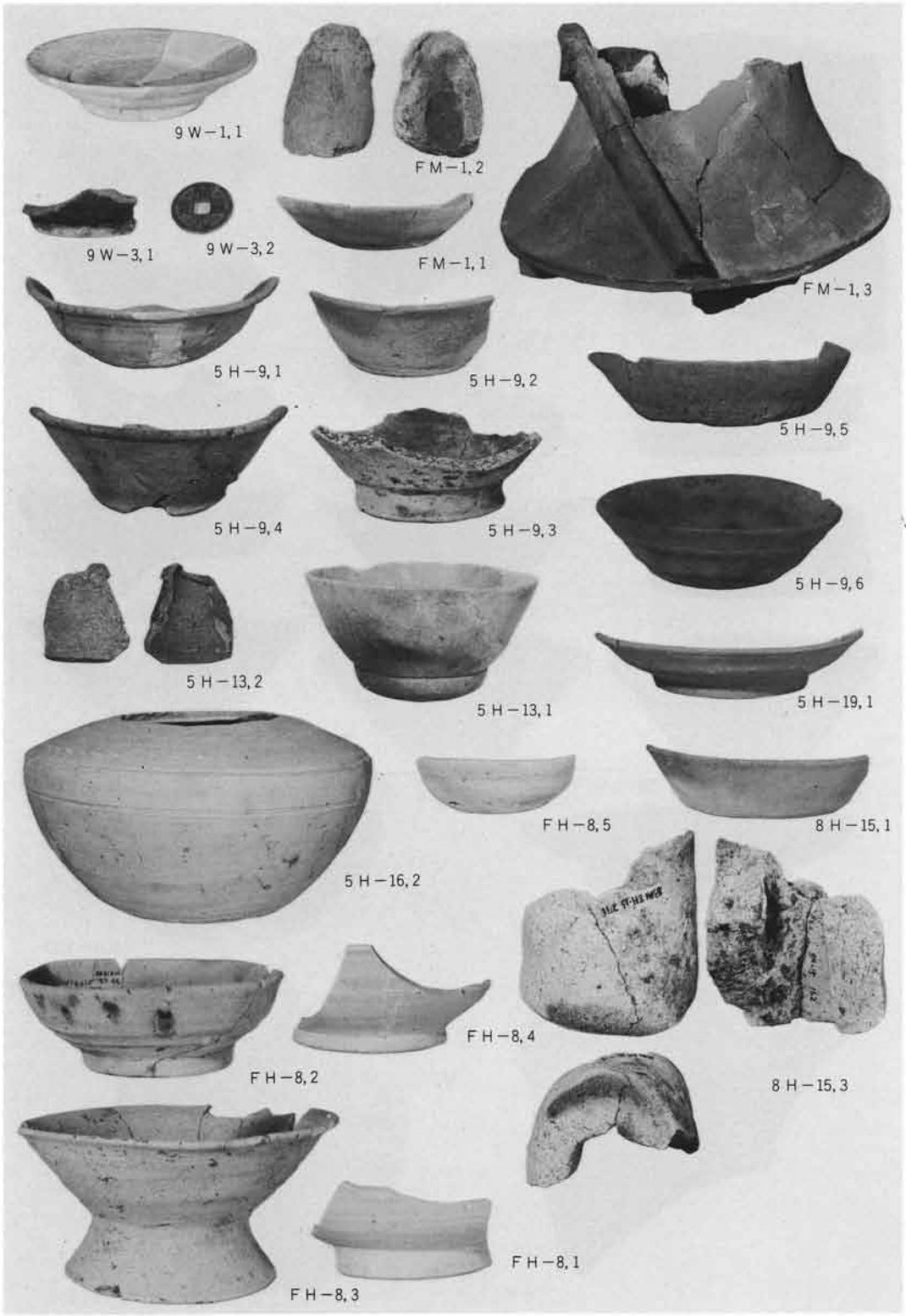
3号　9 H－5，10H－4，5 H－8･12･18号住出土遺物



5 H－14, 10H－3, 9 H－1·8号住出土遺物


8 W－1, 8
8 W－1, 10
9 H－8, 7
8 W－1, 2
8 W－1, 11
8 W－1, 9
8 W－1, 1
8 W－1, 6
8 W－1, 12
8 W－1, 14
8 W－1, 4
8 W－1, 3
8 W－1, 5
8 W－1, 7
8 W－1, 13
8 W－1, 15
8 W－1, 16

9 H－8，8 W－1 出土遺物



9 W－1·3, F M－1, 5 H－9·13·16·19, 8 H－15, F H－8 出土遺物

元総社明神遺跡 II

昭和59年3月31日　印刷
昭和59年3月31日　発行

発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12—1

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67